

## 小学校生き方探究教育のさらなる充実を求めて

— 自己実現をめざして、よりよく判断する力を育てる教科学習の実際 —

本市で生き方探究教育が取り組まれるようになってから四年目を迎える。各校の実態に応じた、独自性のある取組も増えてきている。しかし、本研究で行った指導者への意識調査からは、この教育が本市で十分に浸透しているとはいえない現状が見えてきた。

生き方探究教育の更なる充実のためには、この教育を「特別な教育」と見る狭いとらえ方から脱却する必要がある。そのためには、生き方探究教育を実践する意義や方法を、指導者が十分に理解した上で、日々行われる「教科学習」の中で、「生き方探究教育の視点を踏まえた授業」を実践していくことが求められる。

本研究では、研究協力校における、国語科・算数科・理科の実践授業の中で、教科の目標を達成するため、学習課題を自ら選択・発見したり、適切な方法で解決したりすることができるような指導・支援を採り入れた。また、生活や社会と学習とのつながりを意識したり、学習を振り返り、自分の成長やつまづきを認識したりすることができる活動を採り入れた。これらの指導・支援や学習活動は、生き方探究教育で育てたい力を育む視点から採り入れている。このような授業の実践例を、「生き方探究教育の視点を踏まえた教科学習のモデル例」として提示した。

実践授業では、教科学習の中で、よりよい判断や情報活用を重ねながら課題解決に向かう姿や、「振り返りカード」を活用して自分の成長を振り返り、自己実現をめざす子どもたちの姿が見られた。

# 目 次

はじめに	1	第3章 生き方探究教育の視点を踏まえた 教科学習の実際	
第1章 「教科学習」で生き方探究教育を 実践する意義		第1節 教科学習のモデル例	
第1節 求められる「教科学習」での実践		(1) 第5学年算数科「ならした大きさ(平均)」の実践の様子	18
(1) 明日からでも実践できる生き方探究教育	1	(2) 第4学年算数科「はしたの大きさの表し方を考えよう(小数)」の実践の様子	20
(2) 生き方探究教育の現状から見えてくること	3	(3) 第4学年理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」の実践の様子	22
第2節 教科学習と5領域の力との関連		(4) 第2学年国語科「だいじなところに気をつけて読もう『サンゴの海の生きものたち』」の実践の様子	25
(1) 教科の目標と5領域の力との関連について	4	第2節 振り返りカードの分析と活用	
(2) 学習活動と5領域の力との関連について	6	(1) 振り返りカードの分析	30
第2章 教科学習で取り組むための具体的な方法		(2) 振り返りカードの活用の実際	36
第1節 単元の指導計画案と本時の学習指導案の作成		第4章 生き方探究教育のこれからの展望	
(1) 指導計画案と学習指導案の様式の工夫と考え方	9	第1節 研究の成果と課題	
(2) 生き方探究教育の評価について	11	(1) 研究の成果 ～学習意欲の内発的動機づけをうながす生き方探究教育～	38
第2節 各学習場面で大切にしたい学習活動と振り返りカードについて		(2) 研究の課題 ～「実践」から「継続」へ～	39
(1) 各学習場面で大切にしたいポイント	12	第2節 さらなる充実を求めて	40
(2) 振り返りカードの工夫と活用法	14	おわりに	41
		〔付表〕	42

<研究担当> 井上 拓哉 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立竹田小学校  
京都市立桃山東小学校

<研究協力員> 坂本 恵一 (京都市立竹田小学校教諭)  
宮下 佐知子 (京都市立竹田小学校教諭)  
仲榮真 愛 (京都市立桃山東小学校教諭)

## はじめに

生き方探究教育を、教育課程でどのように実践すればよいのだろうか。「京都市キャリア教育スタンダード〈概要編〉」(以下、〈概要編〉とする。)では、次のように説明している。

生き方探究教育の推進は一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、従来の教育の在り方を幅広く見直すことであり、正に今次教育改革の理念と方向性を示すものであるといえる。(1)

三村は、「キャリア教育は教育改革の理念を示すもの」とした上で、「『キャリア教育』は、特定の内容を持った、あるいは特定の時間、特定の教科・領域を使った教育活動を示すものではない」(2)と説明している。そして、「『キャリア教育を新しく導入する』というのではなく、『キャリア教育の視点で学校教育をよりよくしていく』ととらえることが大切である」(3)と述べている。

これらのことから、生き方探究教育の実践とは、新しい教育を実践するというのではなく、今までの教育を、「生き方探究教育の視点」でとらえ直すことであるといえる。

ここでいう「視点」を、どのようにとらえればよいのだろうか。平成21年3月に、国立教育政策研究所生徒指導研究センターから出された「自分に気付き、未来を築くキャリア教育 小学校におけるキャリア教育推進のために」では、「キャリア教育の視点」について、「将来の社会的自立・職業的自立を念頭におきながら、子どもたちの成長や発達を促進する見方を持つことです」(4)と説明している。

このような「視点」は、多くの指導者が普段からもっているものであり、特別な視点ではない。子どもたちの将来の姿を念頭におき、いま大切にしたい教育活動の展開を考えるという視点をもって、「全ての教育活動」で、この教育の実践を進めることが求められているのである。

本市施設「京都まなびの街 生き方探究館」で行っている体験的な活動や、職場体験などの職業に関する学習のみを生き方探究教育としてとらえるのではなく、日々の教育活動の中でもこの教育が実践できるという考えを広めるには、教科学習における実践を増やすことが大切であると考え。その具体的な実践方法や成果、課題について本研究で明らかにし、「明日から始められる生き方探究教育」をめざしたい。

- (1)京都市教育委員会『京都市キャリア教育スタンダード 生き方探究教育 〈概要編〉』2008.2 p.5
- (2)三村隆男『図解 はじめる 小学校キャリア教育』実業之日本社 2004.11 p.8
- (3)前掲(2) p.8
- (4)国立教育政策研究所生徒指導センター『自分に気付き、未来を築くキャリア教育 小学校におけるキャリア教育推進のために』2009.3 p.15

## 第1章 「教科学習」で生き方探究教育を実践する意義

本章では、教科学習でこの教育を実践することの意義について述べるとともに、生き方探究教育の現状と課題を明らかにし、その打開策について探る。また、生き方探究教育で育てたい力を、教科学習の中で、どのようにとらえるのかということについて示す。

### 第1節 求められる「教科学習」での実践

#### (1) 明日からでも実践できる生き方探究教育

教科学習で生き方探究教育を実践することができるということは、明日の授業から実践が可能になるということである。体験的な活動を中心とした大単元の取組や、学校全体、地域全体を巻き込んだダイナミックな取組は、その意義を十分に理解できていたとしても、すぐに実践するのは困難である。そう考えると、毎日の教科学習において、この教育を実践する方法を提示することは、重要であると考え。

また、生き方探究教育の視点を踏まえた授業を行うことは、教科固有の目標の達成にも有効であると考え。生き方探究教育の視点を授業に採り入れることの重要性は、学習指導要領の総則に示されている言葉からも明らかである。「第4 指導計画の作成などに当たって配慮すべき事項」の中では、次のように示されている。

2(4) 各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。(5)

生き方探究教育で育てたい5領域の一つである、「自己の夢をつくり上げる力」(自己理解・将来設計能力)を教科学習で育むことを考えたとき、子どもたちが学習の見通しをもったり、毎時間の自己の振り返りをしたりすることが大切になる。教

科学習において、自分のつまずきやがんばり、友だちの良さや学んだことを振り返ることで、次の時間にがんばりたいことや、次の時間までに克服しなければならないことを、決定・判断する。そのような活動の積み上げは、自己を知り、将来を設計する力を育む支援となる。

また、学習指導要領の中で、次のようにも示されている。

2(5) 各教科等の指導に当たっては、児童が学習課題や活動を選択したり、自らの将来について考えたりする機会を設けるなど工夫すること。(6)

課題設定の場面で、子どもたちが自らの課題や活動を選択することは、子どもたちの学習に向かう態度を主体的にし、また、そのことが、学習意欲の向上にもつながると考える。また、自らの将来について考え、今の自分を振り返り、なりたい自分をめざすことは、その子どもの自己理解をうながすことになる。これらのことは、まさに生き方探究教育の視点につながることでありといえる。

更に、生き方探究教育を実践する上で重要な視点として、「学習したことと生活や社会とのつながりを意識させる視点」は、とても大切である。学習したことが、将来どのようなことに役立つのか、なぜいま、この学習に取り組む必要があるのか、学習したことが、次の学習とどのようにつながっていくのかということを理解するような活動を、積極的に授業に採り入れることも、この教育を実践する重要な意義といえる。

学習指導要領では、学習した内容を身の回りの生活で活用することの大切さが、繰り返し述べられている。例えば、算数科の目標の解説には、次のように書かれている。

(3) 「日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てる」  
・ここでの日常の事象とは、児童の生活や学習の場面において、広く算数を活用する対象となる事象を意味している。

(5) 「進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる」  
・ここでいう「生活や学習」については広くとらえることができる。児童の家庭や学校での生活、地域社会での生活があるし、将来の社会生活も含まれる。(7)

このように、社会で生きていく際に、学習したことをどのように生かしていくのかという視点は、各教科でとても大切にされている。このことから、生き方探究教育の視点を踏まえた教科学習が求められているのである。

キャリア教育の現状として、国立教育政策研究所教育課程研究センターから、キャリア教育の成果と課題が報告されている。同センターから出された、『学校におけるキャリア教育支援に向けて－協働で取り組むカリキュラムづくりを目指して－』（以下、「学校におけるキャリア教育支援に向けて」とする。）の中で、キャリア教育の成果として、以下の三点が挙げられている。

- ①学校におけるキャリア教育のイメージが豊かになり、様々な実践研究が進んだ。
- ②中学校における職場体験が普及し、その意義も教員が実感するようになった。
- ③進路指導の場面で、将来の生き方を考えさせる指導が意識されるようになった。(8)

本市で進められている「生き方探究教育」においても、同じような成果を見ることができると考えられる。特に、①については、総合的な学習の時間における職業体験や地域との交流体験を採り入れた実践、全ての教育活動を通して自己肯定感を高める実践など、各校の実態に合わせた、独自性のある取組を見ることができる。

一方、キャリア教育の課題として次のような指摘がある。

キャリア教育という言葉の認知度は高まったが、職業に直接関わる教育活動（職業調べ、職業体験、将来設計など）と理解されている傾向も見られ、進路指導や体験活動など一部の領域の課題という意識が根強い。  
(下線は筆者によるもの)(9)

文部科学省は、「キャリア教育推進の手引き－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－」の中で、次のように述べている。

キャリア発達※1には、児童生徒が行う全ての学習活動等が影響するため、キャリア教育は、学校の全ての教育活動を通して推進されなければならない。(10)

※1 キャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」である。  
(文部科学省『小学校キャリア教育の手引き』2010.1 p.7より一部抜粋)

ここでは、キャリア教育は、教科等の枠を越えて、全ての教育活動で推進されるべきものと明記されている。このことから、生き方探究教育は、学校全体の教育に関わる幅の広い教育であるということがわかる。しかし、実際には、教科等において、実践の進捗状況に差がある傾向が見られるという指摘もある。

学校における全ての教育活動においてキャリア教育に取り組もうという意識はあまり浸透していない。とくに、教科におけるキャリア教育の取り組みは、モデル校や研究校においても実践事例が少ないのが現状である。

(下線は筆者によるもの)

(11)

「全ての教育活動」で取り込まれるべきであるという、本教育の方向性が示されているにもかかわらず、キャリア教育は、「教科」においての実践が進んでいないという指摘である。この教育を進めるに当たって、「職業」や「社会・生活」、「体験活動」などと直接結びつきにくい教育課程の実施率は、低くなる傾向があると推測できる。しかし、実際には、学習指導要領の記述からも、教科学習で生き方探究教育の視点を踏まえることが必要であるということを読みとることができるのである。

## (2) 生き方探究教育の現状から見てくること

キャリア教育のおかれている現状を整理すると、次のようになる。

- ・理解や実践が十分に進んでいない。
- ・「一部の領域の課題」（職業に直接関わるような教育）という認識がある。
- ・各教育課程の実践の頻度に差がある。特に教科における実践例が少ない。

文部科学省から出された、これらの指摘を見て、本市での傾向をつかむために、市立小学校の学級担任（講師を含む）27名を対象として、アンケート調査を行った。生き方探究教育の理解度や実施状況などに関わる、全10項目の設問で回答を求めた。3～4ページに示した図1-1～図1-3は、その回答結果である。なお、この学級担任の所属する学校は、生き方探究教育を特別に推進する「研究校」ではない。27名と調査母数が少ないため、この結果が全市の指導者の意識を表しているとはいえないが、一つの傾向を見るものとしてとらえている。

図1-1は、「生き方探究教育を理解できていると

思うか」という、理解度に対する意識を尋ねた設問の回答結果である。

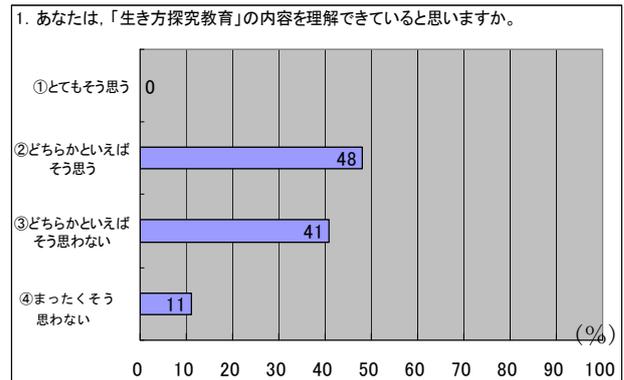


図1-1 生き方探究教育の理解度について

「とてもそう思う」と回答した指導者は一人もいなかった。「どちらかといえばそう思う」と肯定的に回答した指導者も48%と、半数に満たないことがわかる。平成20年、〈概要編〉が各校に配付されてから2年が過ぎたことを考えると、「本市において生き方探究教育が十分に浸透していない」という状況がうかがえる。

図1-2は、「生き方探究教育を意識して実践しているか」という実践の頻度を尋ねた設問に対する回答結果である。

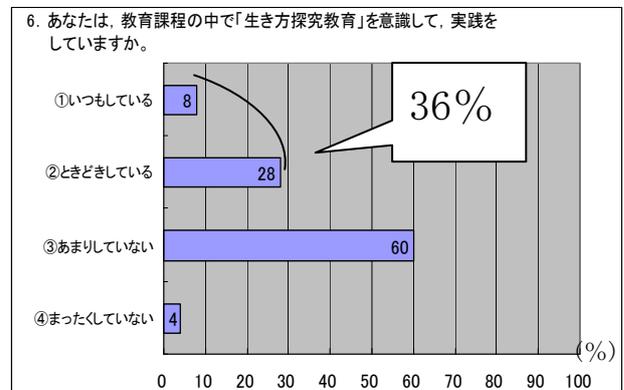


図1-2 生き方探究教育の実践の頻度について

生き方探究教育を意識して、「いつも、もしくはときどき実践している」と答えた指導者は36%であり、全体の約1/3程度であった。

この二つのグラフから見てくることは、この教育に対する理解が十分とはいえず、実践についての意識が高いとはいえない実態である。

また、実践している指導者に対して、どの教科等で実践しているかを聞いた設問の回答結果からは、比較的实践が多いのは、「総合的な学習の時間」「社会科」「道徳」「特別活動」ということ

がわかった。

総合的な学習の時間に実践が多い理由は、体験的な学習を重視しているこの領域の特性や、スケジュールシフト学習の取組などを、指導者が意識したからであると考えられる。社会科で実践が多いのは、総合的な学習の時間と同じように、体験的な学習が多かったり、社会見学などで学校外の人たちとつながりをもったりするといった、教科の特性を意識したからであると考えられる。

また、小学校学習指導要領「第2節 社会」の、第3学年及び第4学年の内容にある、「地域には生産や販売に関する仕事があり、それらは自分たちの生活を支えていること」(12)を学ぶというような、職業や仕事に関連した内容に関わって、実践を行ったからであると考えられる。

道徳の時間に実践が多いのは、「働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く」(13)「自分の特徴を知って、悪い所を改めよいところを積極的に伸ばす」(14)など、働くことの大切さや、自他の理解に関連した実践を行ったからであると考えられる。

また、特別活動では、学級活動の内容にある「望ましい人間関係の形成」(15)「清掃などの当番活動等の役割と働くことの意義の理解」(16)など、人間関係形成や自己の役割認識に関連した実践を行ったからであると考えられる。

図1-3は、生き方探究教育を「実践していない」、もしくは「あまり実践していない」と回答した指導者に対し、「生き方探究教育を実践していない理由」について尋ねた設問の回答結果である。

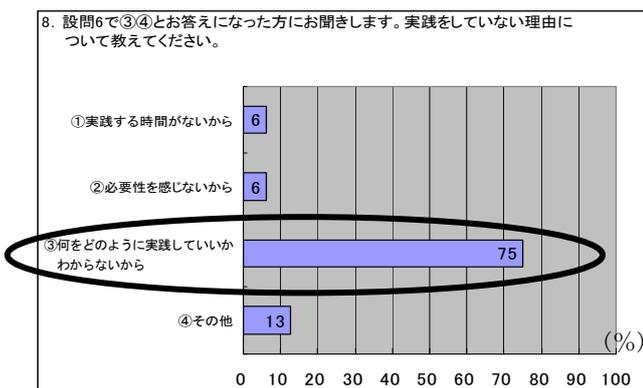


図1-3 生き方探究教育を実践していない理由について

回答結果を見ると、「③何をどのように実践していいかわからないから」と回答している指導者は、75%に及ぶ。また、「④その他」と回答している指導者は、「生き方探究教育について十分に理解できていないから。」という理由を記述している。

このことから、生き方探究教育の実践が進まない一つの大きな原因として、「実践のモデル例が少なく、実践方法が不明確である」ということが考えられる。

生き方探究教育の実践方法がわからないという指導者が多いという現状を打開するためには、この教育の理解を広める取組（理論研修会や研究会活動）を、継続して行っていくことが考えられる。このことに加え、筆者は、教科学習での多様な実践のモデル例を提示していくことが、大切であると考えている。そのことにより、指導者が、この教育を実践するきっかけを生むことになると考えるからである。

実践方法がわからない指導者にとって、地域性を生かした他校の活動例や体験的な活動例は、すぐに参考にして、実践に移せるというものではない。文部科学省からの指摘にあるように、紹介されている実践のモデル例の多くは、総合的な学習の時間を中心とした、職業観や勤労観の育成を重視したものが多く、「教科」でのモデル例は少ないという実態がある。しかし、教科学習であれば、自分の進めたい教科で、すぐにでもこの教育を実践することが可能になる。

指導時数の多い教科学習で実践が広まれば、モデル例も、次々と提案されることとなる。指導案の様式の検討や、その授業にどのような生き方探究教育の視点が組み込まれ、そのことが、教科の目標の達成にどのように有効であったかという検証が進むことにもつながる。その結果、この教育の理解や実践が、より広まると考えられる。

実践が進まないということは、この教育への理解も進んでいかないということである。それでは、いつまでもこの教育の意義や有効性が理解されないことになるのではないだろうか。

教科学習での実践が増えることにより、この教育への理解が広まったり、この教育の実践方法を検討・議論する場が増えたりすることが、本市における、この教育の更なる充実につながると考えている。

## 第2節 教科学習と5領域の力との関連

### (1) 教科の目標と5領域の力との関連について

2002年、国立教育政策研究所は、「キャリア教育における職業的(進路)発達に関わる諸能力」(以下、「4領域8能力」とする。)を、キャリア教育で育てたい力として次ページの表1-1に例示した。(17)

表1-1 キャリア教育における職業的(進路)発達に関わる諸能力  
(国立教育政策研究所生徒指導研究センター作成)

人間関係形成能力	自他の理解能力
	コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・探索能力
	職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力
	計画実行能力
意思決定能力	選択能力
	課題解決能力

本市では、この「4領域8能力」を改編し、生き方探究教育で育てたい力として、表1-2に示した「5つの領域と17の力」(18)(以下、「5領域17の力」とする。)を作成した。

表1-2 「生き方探究教育」における5つの領域と17の力  
(京都市教育委員会作成)

共生	(1)人と共に生きる力 (人間関係形成能力)	①自分と他者を理解する力
		②コミュニケーションを豊かにする力
		③世界に視野を広げる力
(2)社会で共に生きる力 (社会参画能力)	④地域と共に生きる力	
	⑤集団に適応し共に生きる力	
	⑥家族と共に生きる力	
(3)よりよく判断する力 (意思決定能力)	⑦自らの意思と責任で判断する力	
	⑧自らが考え選択する力	
	⑨自らの課題を見つけ解決する力	
自立	(4)情報を集め活用する力 (情報活用能力)	⑩情報を収集し探索する力
		⑪職業について理解する力
		⑫情報技術を活用する力
	(5)自己の夢をつくり上げる力 (自己理解・将来設計能力)	⑬自分の社会的役割を認識する力
		⑭計画を企画し実行する力
⑮心理的な自己自立を図る力		
⑯社会的な自己自立を図る力		
		⑰意欲的に学ぼうとする力

各学校では、この「5領域17の力」を基にして、それぞれの実態に合わせた生き方探究教育に取り組んでいる。

学校におけるキャリア教育支援について、国立教育政策研究所は、キャリア教育を教科学習で実践する際、「あくまでも教科等の目標を達成する上で、キャリア教育の視点を生かす意義がある」(19)と述べている。これは、生き方探究教育で育てたい力を意識して、教科学習の学習活動を見直すことは、「教科等の目標を達成する」ことに深く関与していることを指摘していると考えられる。このような観点から、「5領域17の力」と教科の目標との関連を見ていくことが重要である。

教科には、それぞれ固有の目標やねらいがある。では、教科学習の中に「5領域17の力」をどのように位置づけたらよいのだろうか。〈概要編〉には、生き方探究教育を推進するための全体計画を作成するに当たり、各教科等の相互関連を図る視点が重要であるとした上で、次のような要点を挙げている。

④各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などの目標に沿って、生き方探究教育の視点に立った授業の方法や目標を定める。(20)

※2 〈概要編〉では全体計画を作成するに当たっての要点として①～④の項目を挙げている。

これを見ると、授業の展開や目標を考える際に、生き方探究教育で育てたい力を関連づけることが重要であるということがわかる。本研究では、このことを念頭におきながら、単元の指導計画や学習指導案を作成している。その考え方や具体例については、第2章で詳しく述べる。

また、筆者は、本研究を進める上で、「よりよく判断する力」を5領域の中でも、特に大切な領域と考えている。子どもたちが、様々な学習場面の中で課題解決に向かう際に、適切な「判断・選択・解決」は、欠かすことができない。この領域について、〈概要編〉は以下のように説明している。

自己の意思と責任でよりよい選択・決定・判断をおこなうとともに、その過程の課題に積極的に取り組み、克服する力

⑦自らの意思と責任で判断する力

⑧自らが考え選択する力

⑨自らの課題を見つけ解決する力 (21)

※3 「17の力」として示されている力のうち、⑦～⑨の力は「よりよく判断する力」の領域に含まれるとしている。

教科学習の中には、⑦～⑨の力を育むことができる学習場面や学習活動が数多くある。

例えば「課題設定」の場面では、自ら課題選択をしたり、自分なりの根拠をもって、実験方法や表現方法を選択させたりする活動を設定することができる。「課題解決」の場面では、説明の仕方や解決方法を選択する場面や、自分の意見を吟味したり、文章を推敲したりする活動を設定することができる。また、話し合い活動で、ほかの人の意見と自分の意見を比べながら聞く場合にも、よりよい判断力は求められる。このように、教科学習の様々な学習場面で、この力は重要な役割を果たす。

この力を重要視するもう一つの根拠として、「小

学校学習指導要領解説 総則編」に、次のような記述がある。

各教科等の指導において、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るとともに、これらの活用を図る学習活動を行うに当たって、児童が主体的に自分の生活体験や興味・関心をもとに課題を見付け、自分なりに方法を選択して解決に取り組むことができるように課題選択能力や解決能力を育てることが必要である。  
(下線は筆者によるもの) (22)

この中で、下線で強調した部分は、「よりよく判断する力」に関わっている部分である。「主体的に」「課題を見付け」「自分なりに方法を選択して」などの言葉は、「よりよく判断する力」の大切な要素でもある。

また、筆者は、この力を他領域と並列な関係としてとらえるのではなく、「自己実現に向けて、他領域の力を発揮させる上で重要な力」としてとらえることができると考えている。図1-4は、他領域の力を、全ての教育活動の中で発揮する際に、その力をよりよく選択、判断しながら活用し、自己実現をめざす教育活動のイメージである。

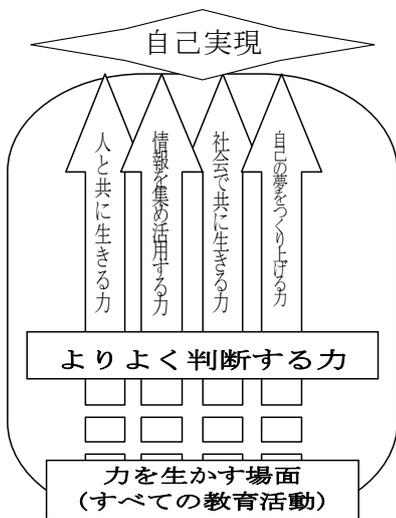


図1-4 自己実現をめざして、身につけた力を発揮している図 (よりよく判断する力はどの力にも関連している。)

このイメージを、具体的な例を挙げて説明する。他者とよりよい人間関係を形成したり、自分の望む社会参画をしたりするためには、自分がどのような関わり方を望み、どのような言動をとるべきなのかを、「選択・決定・判断」していかなくてはならない。また、情報を活用する際には、どのような情報をどのような形で活用し、いかに相手にわかりやすい形で発信していくのか、「選択・決定・判断」する必要がある。更に、自分の生き方や教科学習での目標に向けて自分の今後の活動をプランニングするとき、自分が何を望み、何を目標にし、その目標に向けてどのような進路や計画、手段や方法をとるべきかを、「選択・

決定・判断」する必要が生まれてくる。

このように考えていくと、ほかの4領域の力を身につけ、その力を発揮させるためには、この「よりよく判断する力」が、十分に備わっている必要があると考える。更に「概要編」にも、「人が望ましいキャリアを形成していく上で最も主要な位置を占める『意思決定能力』は『よりよく判断する力』とし、共生と自立の両面に深く関わることから共通の領域として位置づけた。(下線は筆者によるもの)」(23)と記されている。

「最も主要な位置」「共通の領域」という言葉からも、よりよく判断する力の重要性や、他領域を横断するという性質を読みとることができる。

以上のことから、本研究では「よりよく判断する力(意思決定能力)」を、特に重要視し、研究の柱としていくこととした。

## (2) 学習活動と5領域の力との関連について

教科学習における「学習活動」を、生き方探究教育の視点でとらえたときに、どのような活動が、五つの領域と関連しているのかということについて、以下に示す。

### ◇ 人と共に生きる力(人間関係形成能力)

人は、周りの人と適切な関係を築くことで、社会を構成している。ほかの人と協力し合いながら課題に向かうことができる能力は、社会で生きていくためには、必要不可欠な能力であるといえる。

教科学習の中で人と関わる場面はたくさんある。ペアやグループ、クラスで、話し合ったり考えを出し合ったりする話し合い活動も、その一つである。また、ゲストティーチャーや学習ボランティアの人と、コミュニケーションを図ったり、一緒に活動したりすることも、この能力を育む大切な活動となる。話を聞くときには、友だちの意見をしっかりと受け止め、自分が話すときは、相手がいることを十分に意識した話し方ができるように、聞き方や話し方を、授業の中で発達段階に合わせて指導することが求められる。

### ◇ 社会で共に生きる力(社会参画能力)

子どもたちの周りに広がる社会。その中で自分の役割や立場をわきまえ、適切な行動を取ることができることは、社会人として大切な力である。地域や家族を大切に思う心情や、助け合いながら生かされているという思いをもたせることが、この力を育むことにつながる。集団に適応し、地域

や家族と共に生きる力を育むことは、その子どもの社会的自立や経済的自立をうながす点でも大切である。

教科学習の中では、地域で行う体験学習や、社会とのつながりを感じる学習活動の中に、社会参画能力を育てる機会があると考えている。学習で身につけた内容が、社会や地域、家族とどのようにつながっているのかということを知ることで、社会の中で生きている自分の役割や責任を感じ取る心情を育むことができると考える。また、集団での活動や話し合い活動を、積極的に授業に採り入れることも大切である。その際、「自分の役割や責任を果たしているか」「集団に適応できているか」「相手の気持ちを考えた行動を取ることができているか」「場面や相手に合わせて、適切な態度や行動をとることができているか」といった視点で、一人一人の活動を見ていくことが大切である。

#### ◇ よりよく判断する力(意思決定能力)

社会に出ると、何かを決定するとき、「主体的な判断・選択・解決」が必ず求められる。筆者が考える「意思決定」とは、「自分なりの根拠をもって物事を決定する」ということである。社会に出て、よく考えずに軽はずみな判断をしてしまったり、言われるがまま、根拠もたずに選択してしまったりすることのないように、小学校段階からこの力を育んでいく必要がある。適切で根拠をしっかりとらえた意思決定ができる社会人を育成するために必要な力である。

教科学習では、「判断・選択・解決」を求められる場面が多くある。まずは「自分なりの根拠をもって」課題解決に向かうことを習慣づけることが大切である。ここで大切になる指導者の視点は、子どもたちの「理由や疑問を大切にすること」である。「なぜそう考えたのか。」「なぜそう感じたのか。」ということ聞き返すことで、子どもが根拠をもって考える“習慣づけ”につながる。どの教科においても、子どもたちが、「なぜ」というクエスチョンマークをいつももちながら、学習に臨む態度を養いたい。

#### ◇ 情報を集め活用する力(情報活用能力)

生き方探究教育の大切な視点の一つは、学習したことが、身近な生活や社会にどのように生かされているかということを考えることである。学んだことと社会・生活とのつながりを知ることで、学習する意義がわかり、より主体的に学習に向か

うことができる。また、体験的な活動を、学習活動の中に多く採り入れることも重要である。そこで体験したことを、知識として次の活動に生かす力が求められている。生き方探究教育という「情報」とは、メディア機器やデジタルコンテンツなどを活用して、収集したり活用したりする「情報」のみをさすのではない。授業で得た知識、人から聞いた話、辞書などで調べた内容も含めて、「情報」であると考えている。体験を通して得た「情報」をよりよく判断し、どう生かしていくのか。その活用力が今の社会では求められる。〈概要編〉の中で、「幅広く情報を活用して、自己の将来の夢の実現や生き方の選択に生かす」(24)という文章中に示されている「情報」には、そのような意味が含まれていると考える。

教科学習の中では、その単元で習得できる力は、子どもたちの身の回りの生活や社会で、どのように生かされているのか、どのような場面で活用されているのかということを取り上げながら、子どもたちの生活体験を交流することが大切である。また、学年の発達段階に合わせて、各メディア機器を使いこなす力を身につけていくことも求められる。更に、画像、映像、デジタルコンテンツから、自分にとって必要な情報を収集する力や、収集した情報を選択して課題解決に生かす力も、教科学習の中で身につけることができると考える。

メディア機器やデジタルコンテンツを使っていない授業であっても、今までに体験したことや学習したこと、話し合ったことや調べたことで得た知識を、課題解決に向かう際に「活用」という視点をもつことが大切である。以前行った方法を活用して、よりよいプレゼンテーションを行ったり、友だちが提示した考え方からヒントを得て、自分の思考を高めたりする場面を多く設定することも、大切な情報活用の視点であると考えている。そのためには、課題解決の場面で、「自分一人で課題に向かう時間」と、「グループやクラスで話し合いながら課題に向かう時間」を、課題に合わせて柔軟に設定し、得た情報を駆使しながら、課題解決に向かうようにすることが望ましい。

#### ◇ 自己の夢をつくり上げる力(自己理解・将来設計能力)

将来の自分を想像して、自己の夢をつくり上げる力を育むことは、その子どもの生涯教育につながるという意味で、生き方探究教育の特性が最も表れた能力だといえる。振り返り活動などを通し

て、自己理解や、自己の役割認識を深めることが大切である。

そして、自己実現をめざして、具体的な目標を設定した上で、何かにチャレンジしたり取り組んだりすることが大切である。「役割や自己の理解」→「目標設定」→「実践」→「振り返り」という、一連の活動を繰り返していくことが、心理的・社会的自立を図ることにつながると考える。

活動や学習を振り返る時間を設定し、自分たちの活動を振り返ったり、先のことを見通して目標を立てたりすることが、この力を伸ばすことにつながる。従来行ってきた教育活動の中には、この能力を育む上で、有効な活動が多くある。それらの活動を、「生き方探究教育の視点」でもう一度とらえ直すことが重要である。

教科学習の中では、「毎時間の振り返りの記録」「感想文の蓄積」「ノートの学習記録」などで、自分の考えの変容をとらえられるように工夫することが大切である。相談活動を通して、自分の考えや思いを友だちや指導者に聞いてもらい、そのことで、自信をもって、意欲的に活動できるようになることを大切にしたい。自己を振り返り、自分の特性や適性を知る自己理解をうながしていくことが、その子どもの将来設計能力を高めていくことにつながると考える。

このように、生き方探究教育で育てたい力（5領域）は、職業観や勤労観を育てる特定の時間だけではなく、教科学習の様々な場面の学習活動と関連している。5領域の力を育てることを意識して、教科学習の中で、多様な活動や支援の工夫を加えることが大切であると考えます。

平成22年5月17日、中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会から、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（第二次審議経過報告）(25)の報告書が出されている。その中で、キャリア教育の諸能力が整理され、新しい4能力が提示された。この報告書には、キャリア教育で育成する主要能力として、「基礎的・汎用的能力」が例示されている。(26)

キャリア教育で育成する主要能力（基礎的・汎用的能力）  
（国立教育政策研究所事務局作成）

人間関係形成・社会形成能力
自己理解・自己管理能力
課題対応能力
キャリアプランニング能力

なぜ、諸能力の整理が新たに行われたかという理由について、報告書では、「社会・職業への円滑な移行に必要な力は、『生きる力』や『学士力』に含まれる要素であるが、学校から社会・職業への移行の課題をふまえ、その要素を具体化して明示することは十分に意義がある。」(27)と説明している。

これら四つの能力は、生き方探究教育で育てたい5領域17の力と重なる部分が多い。したがって、本研究では、このような文部科学省の見直しを視野に入れつつ、京都市独自の「5領域17の力」を基に、研究を進めた。

第2章では、教科学習でこの教育を実践する上で、どのように単元の指導計画案や学習指導案を作成すればよいのかということや、自己の振り返りを行うための「振り返りカード」の様式、その活用法を具体的に示す。

- (5) 文部科学省『小学校学習指導要領』2008.3 p.16
- (6) 前掲(5) p.16
- (7) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 算数編』2008.8 pp.18~22
- (8) 国立教育政策研究所 学校におけるキャリア教育に関する総合的研究『学校におけるキャリア教育支援に向けて一協働で取り組むカリキュラムづくりを目指して一』2010.3 p.2
- (9) 前掲(8) p.2
- (10) 文部科学省『キャリア教育推進の手引き一児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために一』2006.11 p.8
- (11) 前掲(8) p.3
- (12) 前掲(5) p.34
- (13) 前掲(5) p.103
- (14) 前掲(5) p.104
- (15) 前掲(5) p.113
- (16) 前掲(5) p.113
- (17) 国立教育政策研究所生徒指導センター『職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み開発』2002.11
- (18) 前掲(1) p.6
- (19) 前掲(8) p.7
- (20) 前掲(1) p.51
- (21) 前掲(1) p.8
- (22) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』2008.8
- (23) 前掲(1) p.7
- (24) 前掲(1) p.7
- (25) 中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）』2010.5
- (26) 前掲(25) p.19
- (27) 前掲(25) p.21

## 第2章 教科学習で取り組むための具体的な方法

### 第1節 単元の指導計画案と本時の学習指導案の作成

#### (1) 指導計画案と学習指導案の様式の工夫と考え方

本研究の実践で活用する指導計画案と学習指導案の作成に当たっては、今年度、本市立全学校園に配付されたブックレット、「未来の樹を育てる生き方探究教育(キャリア教育)」を参考にしている。この中で河野は、「学習指導案上に工夫を加えることにより、生き方探究教育の視点をもって、単元の学習計画を組み立てることができます」(28)と述べている。本研究では、教科の目標をおさえつつ、生き方探究教育の視点を踏まえた、指導計画・学習指導案の作成例を提示する。

#### ◇単元の指導計画案の作成について

本研究では、「京都市立小学校教育課程指導計画」(以下「本市版指導計画」とする。)を基に、単元の指導計画案を作成している。表2-1は、筆者が作成した第4学年理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」の指導計画案の一部である。

まず、上部に記されている「目標」の下には、「単元目標と生き方探究教育との関連」という欄を設けている。この欄には、その単元目標と関連する5領域を示し、その力をつけるために重要な学習活動を、具体的な子どもの姿で示している。指導者がこの欄を見れば、この単元を通して、どのような力を育てることができるのかを、意識することができる。指導計画を作成する際には、この欄に記す内容を考えることで、本単元と生き方探究教育との関連を考える契機となる。

次に、全時間の学習の流れを示した枠内の表記について説明する。中心活動や活動内容は、本市版指導計画の内容に、大きな変更を加えていない。しかし、生き方探究教育の視点を盛り込んだ新たな活動や支援、留意点には、それを表す部分に下線を引いた。このことにより、生き方探究教育の視点から見て大切な活動がどのようなものなのかが強調され、わかりやすく提示することができる考えたからである。

最後に、評価の視点の表記について述べる。本市版指導計画の「評価の視点」の欄には、その教科における評価の視点と評価方法が記されている。

その「評価の視点」の文言に、5領域の力につながる言葉を加筆することが望ましいと考える(評価の視点の下線部)。そうすることで、この時間の「評価の視点」と「育てたい5領域の力」とを関連づけて評価することが可能となる。また、評価の視点の下には、5領域の中からこの時間に重視したい領域を表記している。このことにより、授業者が指導計画を見たときに、生き方探究教育で育てたい5領域の力のうち、どの力を意識して授業を進めていけばよいか分かる。

表2-1 第4学年理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」の単元の指導計画案(単元目標・学習計画の一部)

単元	4 とじこめた空気や水をおしてみよう (7時間) 9月上旬～中旬		
目標	閉じ込めた空気及び水に力を加える活動を通して、そのかさや押し返す力の変化を調べ、その変化によって起こる現象をそれぞれの性質と関係づけて追究する能力を育てるとともに、空気及び水はそれぞれ違った性質があるという考えをもつことができるようにする。 ※実験する際にグループの中で役割を分担し、それぞれの責任を果たしながら進めることができる。(社会参加能力)		
単元目標と生き方探究教育との関連	※より遠くへ飛ばす空気や水をつくるために、材料を選択し、試行錯誤を繰り返しながら、閉じ込めた空気や水の性質を実感することができる。(意思決定能力) ※閉じ込めた空気や水の性質が、生活のどのような場面で活用されているかを話し合ったり探したりすることができる。(情報活用能力)		
単元の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然事象への関心・意欲・態度</li> <li>科学的な思考</li> <li>観察・実験の技能・表現</li> <li>自然事象についての知識・理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>閉じ込めた空気や水に力を加えたときの現象に興味・関心をもち、進んで空気や水のかさや押し返す力の変化を調べようとする。</li> <li>空気や水のかさや押し返す力の変化によって起こる現象とそれぞれの性質を関係づけて考えることができる。</li> <li>閉じ込めた空気や水に力を加えたときの変化を比較して、それらの違いをとらえることができる。</li> <li>容器を使って空気や水の力の変化を調べたり、ものづくりをしたりすることができる。</li> <li>空気や水による現象の変化を調べ、記録することにより、思い思いに空気や水の存在を確かめたり、空気や水が押し返す力によって起こる現象と、水は押し縮められないことを理解している。</li> </ul>	
時	学習活動(●中心活動・活動内容)	○支援 ※留意点 評価の視点(評価方法) ※準備物 一評価と関連している生き方探究教育の力	
1, 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 空気を袋に閉じ込め、ついたり、押し込んだりするときの手ごたえを調べる。</li> <li>● 単元を通しての学習の流れを知ったり、本時の目標を立てたりする。</li> <li>● 広い場所に移動して、袋のついたり、ほうり投げたりする。</li> <li>● 空気の存在を知る方法を選択しているか試してみたり、空気をペットボトルの水の中に入れて、空気が入っていることを実感したり、泡となって空気が見えてきたりすることを知る。</li> <li>● 入れ物を逆さにして水の中に入れていき、入れ物の中の水が入ってくるか調べる。</li> <li>● 入れ物の底に穴をあけ、指でふさいで水の中に沈め、水の中で指を離してみたり、入れ物の中の空気や水の中で出してみたりすることで、空気の存在や性質を体で感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 空気に押しつけてどのように認識しているかを確かめることにより、活動の目的を共通理解できるようにする。</li> <li>○ 破れにくい袋を用意したり、広い場所を確保したりすることにより、思い思いに空気や水の存在を確かめることができるようにする。</li> <li>※ 発展的な学習の内容ではあるが、実験も簡単で且日常生活との関連もあるので、全員学習できるようにする。</li> <li>※ 空気を水の中に押し込んだときの手ごたえを通して、かたい入れ物の中にも空気や水が存在することを調べられるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※ がんばりやうとして</li> <li>◎ 本単元の活動を知り、自己表現をめざして学習に取り組もうとしている。(行動・カードへの記述)</li> <li>一自己理解・将来設計能力</li> <li>※ 大きな破れにくい袋</li> <li>※ 宙やペットボトル</li> <li>※ 透明なプラスチックコップ</li> <li>※ 水槽やバケツ</li> <li>◎ 泡を見る方法を主体的に選択しながら、水の中で空気が泡として見えることを知り、空気の存在をかきと理解している。(行動・学習記録)</li> <li>一意意思決定能力</li> <li>◎ 身近な生活で使われている閉じ込めた空気を利用してのものを探そうとしている。(発言)</li> <li>一情報活用能力</li> <li>※ 風船や浮き輪、自転車の図</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 空気の性質を利用して空気や水をつくらせたり、後玉を飛ばすための工夫を考えたりする。</li> <li>● 空気の性質を利用して空気や水をつくらせたり、後玉を飛ばすときに、どのようにするとよく玉が飛ばすかを試行錯誤しながら考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※ 人に向けて飛ばすことが危険であることを指導しておく。</li> <li>※ 的を置くなどして玉を飛ばす場を確保しておく。</li> <li>○ どのような工夫をしたら前玉がよく飛ばすかを考えさせることにより、閉じ込めた空気の性質に気づくことができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 空気の性質を利用して、後玉をよりよく飛ばせながら空気や水をつくらせたり、玉の飛び方について調べることができる。(発言・行動)</li> <li>一意意思決定能力</li> <li>※ ペットボトル(的)</li> <li>※ 透明な筒(押し棒)</li> <li>※ じゃがいも</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 閉じ込めた水に力を加え、水の性質を調べる。</li> <li>● 閉じ込めた空気や水に力を加えた時のことを基にして、自分なりの予想を立てる。</li> <li>● 筒の中に水を入れて、水の体積も押し縮められるかどうか調べる。</li> <li>● 水による現象の変化を記録する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※ 「手ごたえ」を確かめるようにする。</li> <li>○ 空気の場合同様に水を加えたときの変化を比較して考えることができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 閉じ込めた水に力を加えたときの変化を、空気の場合と比較して考えている。(行動・学習記録)</li> <li>一情報活用能力</li> <li>※ じゃがいも</li> <li>※ 透明な筒(押し棒)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 閉じ込めた空気や水の性質を利用して、更に調べたいことを実験で明らかにする。</li> <li>● 授業を通してもっと調べたいと感じたことについて話し合う。</li> <li>● 空気や水の性質を調べる実験の方法を知り、自分のしたい実験を、根拠をもつてグループごとに決定する。</li> <li>● 計画に沿って準備物を準備したり、実験をしたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※ 発展的な学習の内容ではあるが、日常生活との関連もあるので、全員学習できるようにする。</li> <li>※ 閉じ込めた空気や水の性質を知るために、更なる実験を行うという目的意識をもたせるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 閉じ込めた空気や水を利用しての実験をグループで協力し、進んで行おうとしている。(行動・学習記録)</li> <li>一意意思決定能力</li> <li>一人間関係形成能力</li> </ul>

### ◇本時の学習指導案の作成について

表2-2は、第4学年理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」の学習指導案（4時間目）である。

表2-2 第4学年理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」の4時間目の学習指導案

学習指導案 第4学年 理科 単元名「とじこめた空気や水をおしてみよう」(4時間目/全7時間)			
本時の目標 ○空気の性質を利用して後玉をよりよく選択しながら空気でっぽうをつくり、玉の飛び方について調べるができるようになる。 <技能・表現> →意思決定能力			
本時の展開			
学習目標	「空気でっぽうの玉を遠くに飛ばすには、どうしたらいいか考えよう。」		
学習展開	学習活動 (括弧)	○支援 ※留意点 ㊦相談活動	㊦評価の視点 (評価方法) ※準備物
課題設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>空気でっぽうについて知る。</li> <li>本時の流れを知る。</li> <li>今日は、遠くまで飛ばす空気でっぽうをつくってみましょう。</li> <li>どのような工夫をすれば遠くまで飛ばすか予想する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>㊦指導者と相談して本時の学習目標に向けてがんばりたいことを決定する。</li> <li>○よく飛ばす空気でっぽうを演示することにより、意欲的に学習に向かうことができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>㊦がんびりカード</li> <li>※透明な筒 ※栓となる物 (じやがいも、スポンジ、紙、ティッシュ、粘土等)</li> </ul>
課題解決 (個別)	<ul style="list-style-type: none"> <li>止まって、できるだけ遠くに飛ばす空気でっぽうをつくりましょう。</li> <li>空気の性質を利用して空気でっぽうをつくる。</li> <li>気づいたことや考えた工夫をノートに記録するようにする。</li> <li>グループで相談してもよいこととする。</li> <li>後玉を棒で筒の中に押し込み、前玉を飛ばすときに、どのようにするとよく玉が飛ばすかを試行錯誤しながら考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*人に向けて打ったり、割れそうなものを的にしたりしないように注意する。</li> <li>*的を用意する。</li> <li>○グループで相談することにより、自分の判断や予想に自信をもつことができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>㊦空気の性質を利用して、後玉をよりよく選択しながら空気でっぽうをつくり、玉の飛び方について調べるができる。(発言・行動・学習記録)</li> </ul>
課題解決 (クラス)	<ul style="list-style-type: none"> <li>気づいたことや考えた工夫を発表しましょう。</li> <li>実際に演示しながら、説明する。</li> <li>なぜそのような工夫をしたのか、根拠を説明するようにする。</li> <li>空気でっぽうがよく飛ばすためには、どのような工夫をすればよいのかをまとめましょう。</li> <li>密閉していることや早く動かすことが大切だということを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いろいろな栓の材料となるものを用意することにより、多様な試行ができるようにする。</li> <li>○なぜ玉が飛ばすのかという仕組みに着目させることにより、より遠くへ飛ばす工夫に気づくことができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>㊦意思決定能力 どの玉がよく飛びそうかということや予想しながら、根拠をもって後玉を選んでいる。</li> </ul>
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日の学習を振り返りましょう。</li> <li>がんびりカードに、この時間でわかったことやがんばったことを書く。</li> <li>次の時間にがんびりしたいことを書きましょう。</li> <li>次の時間にがんびりしたいことを書く。</li> <li>がんびりカードを提出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学習の振り返りをするることにより、その時間の自分の理解や困りに気づくことができるようにする。</li> <li>㊦友だちや指導者と相談し、学習の目標やがんびり、困りを振り返ったり、次時にがんびりしたいことを考えたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>㊦がんびりカード</li> </ul>

表2-2の上部にある「学習目標」は、授業のはじめに子どもたちに示す本時のめあてである。この学習目標を、毎時間黒板に提示することにより、子どもたちは、本時の学習の方向性を確認しながら学習を進めることになる。また、課題設定の場面で自己の目標を設定する際の、一つの指針にもなる。

学習展開で工夫した点は、学習場面を「課題設定の場面」「課題解決の場面」「振り返りの場面」の三つで表したことである。

「課題設定の場面」とは、授業の冒頭で子どもたちが課題と出会う場面である。また、その課題を自分たちがどのように解決していくのかという、一時間の見通しを立てる場面でもある。

「課題解決の場面」とは、個別、ペア、グループ、クラスという様々な形態をとりながら、課題の解決に向かう場面である。

「振り返りの場面」とは、授業の終わりに、自分や友だちのがんばったことや、初めて学んだり感動したりしたこと、逆に、わからなかったところや難しかったこと、そして、自分のめあてに対

して達成できたかどうかということなどを振り返る場面である。本研究では、この場面で活用するための「振り返りカード」を作成し、実践を進めることとした。

三つの学習場面に共通していえることは、どの学習場面でも、「子どもたちが自分の思いや考えをしっかりとって、主体的に意思決定して取り組む学習活動」を意識した授業展開を考えることが大切であるということである。子どもたちに、答えや解法をわかりやすく指導することも大切であるが、「よりよく判断する力（意思決定能力）」を育むことを念頭におき、課題選択をしたり、根拠をもちながら課題解決したりするように、学習活動を工夫することが大切であると考えている。

本研究で実践した国語科、算数科、理科の学習指導案は、この三つの学習場面で統一して作成している。そのことにより、それぞれの学習場面に合った「生き方探究教育の視点を踏まえた学習活動」を設定することができる。具体的な学習活動については、私案として、42ページの〔付表〕「生き方探究教育の視点を踏まえた学習活動における子どもの姿(例)」に整理して示している。

本時の目標を達成するために、最も深く関わっていると思われる活動を、その時間の中心活動に据えている。例えば、表2-2の時間の中心活動は、「個別に空気でっぽうの後玉を選択し、その飛ばす様子や距離を調べる」という活動である。実験の結果から、空気がしっかり閉じ込められていないと後玉が飛ばないことを知り、そのことから閉じ込められた空気の性質をまとめるという、一時間の流れとなっている。

〔付表〕「(3)よりよく判断する力（意思決定能力）」にある、「自分が考えたことや予想したことを検証するために、試行錯誤しながら解決に向かっている」という一文を参照して、この中心活動を考え設定した。

支援・留意点・相談活動の欄には、支援、留意点を具体的に示した。相談活動を示す支援には、文頭に㊦という印をつけることで、強調して示した。子どもたちが、何かを選択するとき判断に悩んで決められなかったり、本時の振り返りや次時の目標設定に悩んだりしているときに、適宜相談活動を行うという支援である。学習中の机間指導も相談活動の一つとして考えられるが、これは指導者の常時活動ととらえ、表記していない。

最後に評価の欄については、指導計画案と同様、評価の視点と評価方法を枠内に示し、その下に生

生き方探究教育で育てたい5領域の力を一つ、もしくは二つ表記している。そして、その下に「めざす子ども像」を具体的に示している。この「めざす子ども像」は、その上部に示している、「評価の視点」と関連づけて記述している。

これらの工夫を指導計画案や学習指導案に加えることにより、授業のどの部分に「生き方探究教育の考え方」が生かされているのかということを明らかにしている。

## (2) 生き方探究教育の評価について

教科学習の評価を通して、生き方探究教育で育てたい力を評価するということは、教科学習を通して、子どもたちに5領域の力が身についたかどうかを評価することでもある。

「小学校キャリア教育の手引き」は、この教育で育てたい力の評価と、各教科の評価との関連について、「キャリア教育の視点から評価の視点や配慮事項を設定し、評価していくことにより、各教科等の本来の目標をよりよく豊かに達成していくことが重要になる」(29) (下線は、筆者による。)と記している。また、視点のとらえ方については、以下のような例を挙げて説明している。

例えば、あらかじめ指導する教師間において授業の目標に従った評価の視点を確認しておき、これに基づいて児童の学習状況の評価などが考えられる。(30)

本研究で指導計画案を作成した際には、ここに例示されている「授業の目標に従った評価の視点」を設定するという考え方を採り入れている。学習指導案には、本時の目標に関連させて、具体的な「めざす子ども像」を示している。また、各時間の評価の視点を、生き方探究教育で育てたい力と関連した表記で示すことにより、その時間の評価活動を行うことが、生き方探究教育で育てたい力の評価につながるように、その文言を工夫した。つまり、一時間の授業の中で、「教科の評価の視点」と「生き方探究教育の評価の視点」という、二つの評価を設定するのではなく、この二つの評価を一体化して示すこととした。そうすることにより、その時間の中心活動を通して教科目標を評価することが、生き方探究教育で育みたい力の評価にもつながると考えるからである。

具体的に、どのように「評価の視点」を作成したのかということについて、前ページ表2-2に示した、第4学年理科「とじこめた空気や水をおして

みよう」の学習指導案を例に挙げながら説明する。「本市版指導計画」では、本時の評価の視点(評価方法)を次のように示している。

空気の性質を利用して空気でっぼうをつくり、玉の飛び方について調べることができる。  
(行動・学習記録) (31)

この評価に生き方探究教育の視点を採り入れ、実践授業のために作成した学習指導案では、次のように示している。

空気の性質を利用して、後玉をよりよく選択しながら空気でっぼうをつくり、玉の飛び方について調べることができる。  
(発言・行動・学習記録)

下線で強調した部分が、新たに加えた評価の文言である。ここでいう、「後玉をよりよく選択しながら」というのは、「根拠をもって後玉を選択しているか」ということであり、「よりよく判断する力(意思決定能力)」を育むことができたかどうかを、この活動の評価することで見取ることができる。その下には、具体的な子ども像として次のように示している。

### 【意思決定能力】

どの玉がよく飛びそうかということ予想しながら、根拠をもって後玉を選んでいる。

根拠をもって後玉を選べたかどうかは、子どもたちの行動の様子や発言、学習記録の内容を見ていくことで評価することができる。

また、文部科学省は、「小学校キャリア教育の手引き」の中で次のように述べている。

単元において定められた評価の視点の全てを1単位時間の授業において評価するのではなく、単元において定められた評価の視点のうち、当該時間で重点を置いて指導することとしている視点を中心に評価することが適当である。(32)

このように、5領域の力を評価するとき、毎時間、全ての領域を設定する必要はない。本研究では、基本的に一時間一領域、もしくは二領域を評価の視点に挙げているが、挙げていない時間もある。また、指導計画案のはじめに示している、「単元目標と生き方探究教育で育てたい力との関連」に示した内容は、単元を通してつきたい力であるので、毎時間の評価の中に、必ずしも設定する必要はないと考える。

生き方探究教育で育てたい力は、一朝一夕で身につくものではなく、その児童の発達段階に応じたキャリア形成とともに、徐々に身につけていく力である。そういう意味では、児童のレポートやワークシート、ノート、感想文、記録文などの制作物や行動観察、発言の記録などにより、児童の成長や身につけた力を、きめ細かに見取る必要がある。

教科学習の中で、生き方探究教育で育てたい力を評価することには、もう一つ大切な意味がある。それは、子どもたちの学習状況を的確にとらえ、指導者の授業改善につなげたり、児童の支援に生かしたりするために行うということである。

その時間の教科目標の評価を通して、その時間に設定した学習活動が、教科の目標を達成する上で有効であったかということの評価することは、授業を振り返るよい視点となる。また、振り返りカードなどを用いて、子どもたちの学習状況を把握することで、次の時間の指導に生かしたり指導計画に変更を加えたりすることが可能となる。指導者は、自分の指導方法について常に振り返り、授業で採り入れた学習活動に、生き方探究教育の視点が踏まえられていたかどうかを見ていくことが大切である。きめ細かい指導・支援のためにも、生き方探究教育で育てたい力を念頭においた、指導者自身の振り返りが求められるのである。

## 第2節 各学習場面で大切にしたい学習活動と振り返りカードについて

### (1) 各学習場面で大切にしたいポイント

ここでは、学習展開における三つの学習場面で、どのような学習活動を考えることが、「生き方探究教育の視点を踏まえた教科学習」であるのかということについて述べる。

#### ◎課題設定の場面

この学習場面で、特に大切にしたい四つのポイントを示す。

一つめは、「**その一時間、もしくはその単元の、学習の見通しをもたせること**」である。学習の見通しをもつことで、その時間に達成したい自己目標を立てたり、単元の学習計画を立てたりすることが可能となる。子どもたちが、学習に向かう心構えを整えることにもつながる。見通しをもたせることをおろそかにすると、子どもたちの気持ちの準備が整わないまま授業に向かうことになり、

その後の学習意欲に支障が出ると考える。学習計画を子ども自身が立てることで、単元の出口までの活動の流れを把握することができるようになる。時間軸において、今自分がおかれている地点を理解し、出口を見据えて計画的に物事を進めることができる力は、自己理解・将来設計能力の大切な要素である。

二つめは、「**その時間ごとの自己目標をもたせること**」である。自分の苦手とすること、克服したいこと、わかりたいと感じていることなどを、具体的な言葉で表すことで、子どもたちの学習に向かう意欲を高めることができる。また、漠然とした気持ちではなく、「今日はこれがんばるぞ」という思いをもって授業に臨むことにより、一時間一時間を大切にしようとする意識を高めることができるようになる。と考える。

三つめは、「**学習する意義や目的を知ること**」である。本時の学習の内容が、この先どのようなことに役立つのか、どのような職業や生活・社会事象と関わっているのかということを知ることで、学習と生活とを関連づけることが可能になる。また、学習内容が、生活の中にどのように生かされているのかということを知ることで、子どもたちは、学習する意義を理解した上で、学習に臨むことができるようになる。このことは、目的意識をもった、「主体的な学習態度」を養うことにつながる。

自分たちが学習している内容と、実生活にある事象とを関連づけて考えることは、情報活用能力や、社会参画能力を高める上でも重要である。

四つめは、「**子どもたち自らが課題を選択したり、設定したりする活動を採り入れること**」である。例えば、国語科では、子どもたちが単元の導入部で自らが考えた「読みのめあて」を、毎時間の学習目標として設定し、学習に向かうという活動が考えられる。そうすることで、子どもたちは、「自分たちが考えた目標である」という意識をもち、主体的に授業に臨むことができる。他教科では、学習内容の習熟を深めるための複数のプリントや課題から、児童が自ら選択して取り組む活動が考えられる。一律の課題ではなく、数種類の課題の中から、子どもたち自らが重点的に取り組みたいものを選択できるように工夫することにより、自分の苦手としている課題を克服しようと、主体的に学習に向かうことができる。

子どもたちの主体的な判断、選択、発見から課題を設定し、授業を展開していくことは、意思決定能力を育てるという観点からも重要である。

## ◎課題解決の場面

この場面で大切になるのは、「課題解決の方法を、子どもたち自らに判断させること」である。そのために、課題に対して調べたり話し合ったり解決しようとしたりする時間を十分に確保することが大切である。本研究で作成した学習指導案の中には、子どもたち一人一人が課題に向かう場면을「課題解決（個別）」、二人組、班、クラスみんなで話し合ったり協力したりしながら課題に向かう場면을「課題解決（ペア・グループ・クラス）」と表記している。

クラスの子どもたちの実態に合わせて、解決に向かうための方法や手だての提示の仕方を工夫し、どの子どもも自力で課題解決に向かえるように支援する必要がある。例えば算数科で、「小数の筆算の仕方」を指導する際、「整数の場合」を想起させることが一つの支援となる。筆算の位取りの表や、小数は0.1の何個分かであることにより、整数としてとらえることができるということを支援に示す方法もある。支援の方法は子どもの実態によって様々であるが、子どもたちが示された支援や方法から、自分が最も納得のいく方法を選択し、自力で解決に向かう活動を大切にすることが、子どもたちの意思決定能力や情報活用能力を育むことにつながる。

また、クラスの友だちと話し合いながら活動を進めることや、話し方、聞き方のルールを徹底することも、この場面では大切である。グループ活動では、様々な形態が考えられるが、本研究では、ペア、グループ、クラスでの活動を設定している。

グループ活動の良さは、ほかの意見に触れることで自分の考えを広げたり、友だちに自分の意見を話すことによって、考えを整理したりできることである。また、自分の考えに対して助言や指摘をもらうことによって、考えを練り直したり、深めたりすることもできる。更に、話し方・聞き方のルールを徹底することは、相手を尊重する気持ちや態度、場をわきまえた発言などを身につけることにつながる。友だちと話し合いながら、課題解決に向かう活動を積極的に採り入れることは、人間関係形成能力や社会参画能力を育てるという観点からも重要である。

話し合いだけではなく、集団で行動するような活動も多く採り入れたい。グループの中で意見やアイデアを出し合いながら作業を進める過程において、役割を分担したり、自分の責任を果

たしたりすることの大切さを学ぶことができる。また、集団への所属感や協力の大切さなどを学ぶ機会にもなる。

このように、話し合い活動や集団での活動を生き方探究教育の視点からとらえ直すことは、教科の目標を達成するのに有効であるだけでなく、5領域の力を育てる上でも重要な活動であるということがわかる。指導者は、話し合い活動やグループ活動を授業に採り入れる際に、その目的や内容によって、どのような力を育てることができるのかということ十分に理解した上で、授業展開を考える必要がある。

## ◎振り返りの場面

この場面では、「自分のできていること、できていないことを客観的に振り返る活動を設定すること」が大切である。自分が学習について何を理解し、何に困難さを感じているのかということを知るためには、自己を客観的にとらえることが求められる。また、その時間にわかったことやうまくいったこと、逆に、わからなかったことや難しかったことなどを振り返ることで、学習に対する自らの課題や努力したこと（がんばり）、得意・不得意などを、把握することができる。

子どもたちに、「自分の学習を振り返る力」が十分に育っていない実態があれば、その力を育てるために、的確な振り返りができている児童の記述を一つのモデルとして取り上げ、クラスの中で紹介する方法が有効であると考えられる。また、友だちや指導者と相談活動を行い、評価や助言を受けることで、自己について客観的な理解を深めるという方法もある。

自己の活動を的確に振り返るということは、次の課題や自己目標を設定することができるということにもつながる。自己理解が未熟であると、次の目標を設定するときに無理な目標設定をしてしまったり、既に目標が達成されているにもかかわらず、繰り返し自分の目標として設定してしまったりすることが起こりやすい。自己理解能力を育てることは、将来設計能力を育てることと深い関連があり、これらの力をバランス良く身につけることが大切である。

本研究では、課題設定の場面でも述べたように、「振り返りカード」という自己評価シートを準備し、子どもたちの自己理解・将来設計能力を育成するために活用している。

## (2) 振り返りカードの工夫と活用法

実践を進めるに当たり、毎時間の課題設定の場面で自己目標を定め、目標に対して振り返る活動を設定した。その際、振り返りカード(がんばりカード)を活用した。その様式の工夫と活用法について述べる。

本研究では第2学年、第4学年、第5学年で実践を行っている。実践に当たり、子どもたちの実態を把握するため、実践教科に対する意識調査を行った。対象は、研究協力員が担任を務めるクラスの全児童である。交流学級児童は、実践を行った教科の学習時間には交流を行っていないため、意識調査の対象とはしていない。

調査問題は、選択形式(一つを選択)と記述形式で回答する。学年の発達段階に合わせて、設問の文言に変更を加えたり、教科に合わせて尋ねている内容を変えたりはしているが、子どもたちのその教科や授業に対する意識を把握するというねらいは同じである。下表2-3は、実際に行った設問を表にまとめたものである。3教科に共通する設問については網掛けをしている。

表2-3 教科に対する児童の意識調査項目

学年	5年・4年	4年	2年
教科	算数科	理科	国語科
設問①	今、学校でしている勉強は、あなたが大人になって“はたらく”ときに役立つと思いますか。 ①とてもそう思う ②まあそう思う ③あまりそう思わない ④まったく思わない		
設問②	今、あなたが勉強しているのはなぜですか。 ①将来、大人になったときに大切だと思うから ②自分が成長したいから ③「しなくてはいけないこと」だと思うから ④友だちに勉強ができないと思われたくないから ⑤おうちの人や先生にほめられたいから ⑥勉強するのが楽しいから ⑦その他(自由記述)		
設問③	今、あなたが、授業中にがんばりたいことは何ですか。 ①自分の考えを図や絵、文でかくこと ②グループでの話合いで、自分の考えを言うこと ③クラスの前で発表すること ④人の話をしっかり聞くこと ⑤わからないことを自分で調べること ⑥わからないことを質問すること ⑦その他(自由記述)		
設問④	あなたは、算数〔4年生では算数と理科、2年生では国語〕の授業が好きですか。 ①好き ②まあ好き ③あまり好きではない ④好きではない ※以後の設問は、全て同じ選択肢。		

設問⑤	あなたは計算することは好きですか。	あなたは、図鑑で調べることは好きですか。	あなたは、読書することは好きですか。
設問⑥	あなたは文章問題を読んで、解き方を考えることは好きですか。	あなたは、実験をすることは好きですか。	あなたは、文を書くことは好きですか。 →長い文でなくてもかまいません。
設問⑦	あなたは自分一人の力で問題を解くことは好きですか。	あなたは、観察をすることは好きですか。	あなたは、本や図かんを読んで知りたいことを調べることは好きですか。
設問⑧	あなたはグループで話し合っ問題て問題を解くことは好きですか。	あなたは、知りたいことを自分一人で調べることは好きですか。	あなたは、インタビューなどで人に聞いて知りたいことを調べることは好きですか。
設問⑨	あなたはクラスのみんで話し合っ問題て問題を解くことは好きですか。	あなたは、グループで話し合うことは好きですか。	あなたは、グループで話し合うことは好きですか。
設問⑩	あなたは、クラスのみんなの前で、自分の考えを発表することは好きですか。	あなたは、クラスのみんなで話し合うことは好きですか。	あなたは、クラスのみんなで話し合うことは好きですか。
設問⑪		あなたは、クラスのみんなの前で、自分の考えを発表することは好きですか。	あなたは、クラスのみんなの前で、自分の考えを発表することは好きですか。

この意識調査の結果から、子どもたちがその教科に対してどのような思いをもっており、どのようなことをがんばろうと考えているのかということや、発表や話し合い活動に対しての得意・不得意などの意識を知ることができる。子どもたちの現状を把握した上で、振り返りカードに記述された内容に目を通すことにより、子どもたちの変容、成長、がんばりをとらえることができるようにと考え、事前に調査を実施した。

次ページ図2-1は、第5学年算数科「ならした大きさ(平均)」の「振り返りカード(がんばりカード)」を示したものである。

振り返りカードの活用は、児童の“キャリア形成”をうながすことが目的であると同時に、児童の実態をとらえ、次の指導に生かすことも目的としている。この二つの観点から、振り返りカードの様式や項目に工夫を加えた。

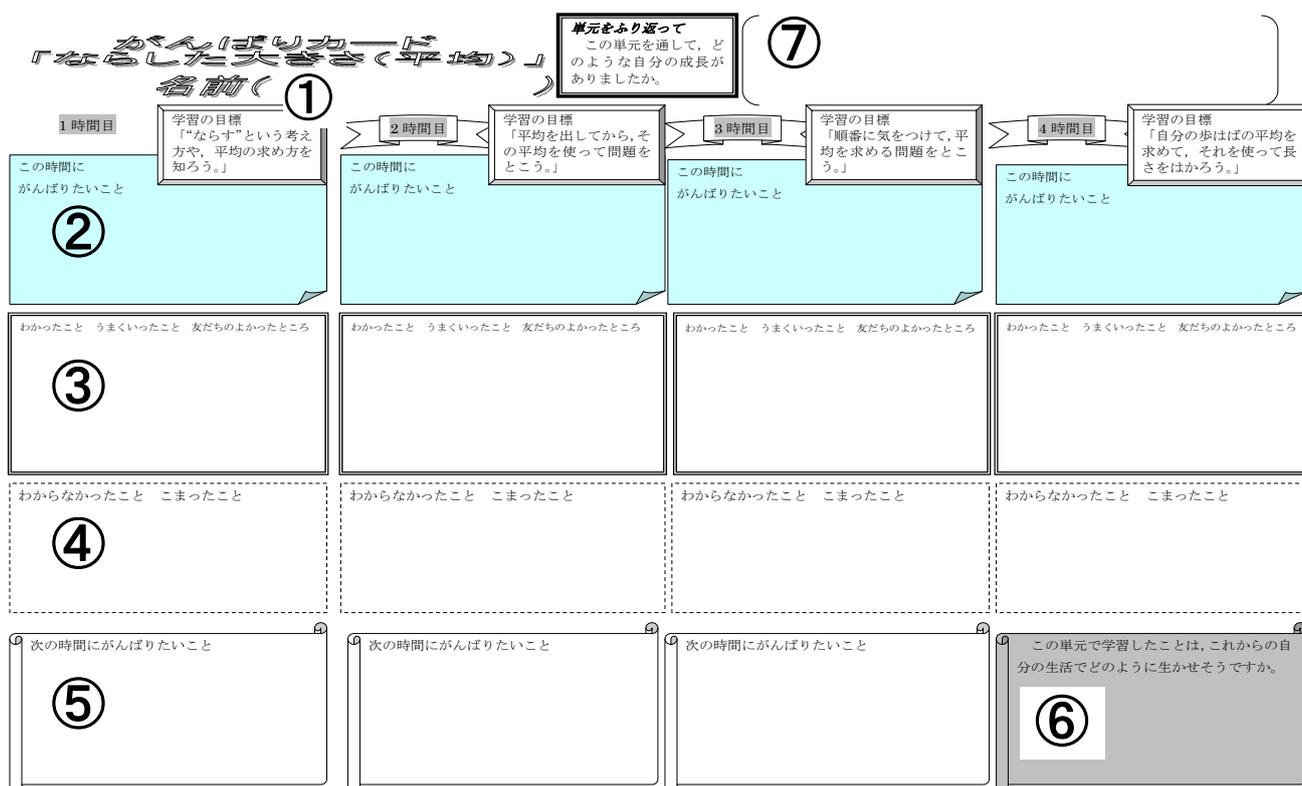


図2-1 第5学年算数科「ならした大きさ（平均）」の振り返りカード

まず、子どもたちの成長やつまずき、工夫やがんばりが、子どもたちの変容の足跡となって「振り返りカード」に表れるように、枠の配置を工夫した。また、単元の1時間目から終わりの時間まで、枠を平行に並べるように配置した。このことにより、指導者も児童も、時系列で変容を追うことができる考えた。

### ①学習の目標

振り返りカードを、単元を見通す単元計画を立てるときに役立つように工夫した。最も上段の枠には、「学習の目標」を表記した。学習の目標とは、その時間に、どのような目標に向かって学習を進めるのかということを示したものである。学習指導案の表の上部にも同じ目標を示している。また、黒板にも毎時間提示することにより、授業中、子どもたちが、いつでもこの目標を振り返ることができるようにした。指導者は、ここに示すべき学習目標を考えることで、単元に入る前に、単元の出口を見据えることとなる。そのことが、子どもたちの活発な発言や多様な考えを引き出すことにつながると考えた。

### ②自己目標

「この時間にがんばりたいこと（自己目標）」を書く枠である。ここには、その時間に自分がめざす内容を示す。そうすることで、自己理解を深め

たり、学習に向かう意欲を高めたりすることにつながると考えた。

ここに書かれる自己目標は、大きく二種類に分けられる。一つは行動に関する自己目標であり、もう一つは学習に関する自己目標である。

一つめの、行動に関する自己目標とは、例えば「手を挙げて発表したいです」とか、「ノートに書く字をていねいに書きたいです」といったような、授業中の行動に関する目標である。この場合、指導者が目標設定を行う意義を、子どもたちにしっかりと伝えておかなければ、目標設定がいい加減になる恐れがある。しかし、行動に関する自己目標は、具体的であるために振り返りやすいので、低学年の子どもたちや、振り返りの経験をあまり積んでいない子どもたちには、行動に関する自己目標を容認し、まず、きちんと目標に対して振り返る経験をさせることから始めるのがよいと考える。

二つめの、学習に関する自己目標とは、その時間の学習目標を見据えた上で、その学習目標に対して「〇〇ができるようになりたい」といった目標を立てることである。図2-1にある第5学年算数科「ならした大きさ（平均）」の振り返りカードを例に挙げると、2時間目の「学習の目標」は、「平均を出してから、その平均を使って問題をとこう」である。その学習目標の内容を踏まえて、「正確に平均の問題を解けるようになりたい」、「平均を使うという意味がわかるようになりたい」といった

自己目標を立てることができる。

学習に関する自己目標を設定する上で大切なことは、あらかじめ、「その時間にどのようなことをめざして学習するのか」ということがきちんと示されていることである。学習に関する自己目標を設定するためには、指導者も児童も、本時の流れについて、見通しをもった上で授業に臨んでいることが重要である。このことは、将来設計能力を育てるという視点においても、教科の目標に迫るという視点においても、また、指導者の力量を高める上でも、重要なことである。

自己目標を設定する際には、目標の内容が具体的にあり、その目標を達成できたかどうかを、設定者自身が評価しやすい文言にすることが大切である。目標を立てたはよいが、それをどのように達成したと見るのかが判断できないような目標では、自己実現をめざすことは難しい。例えば、行動面に対する自己目標であっても、「先生の話をよく聞いてがんばる」という抽象的な目標では、できたかどうかの判断は難しい。それに対して、「今日は、一回以上は必ず手を挙げて発表する」という具体的な目標であれば、達成できたかどうかは明らかであり、授業中に、自分の立てた目標に何度も立ち返ることもできる。

学習に関する自己目標を立てる場合も、具体性を欠いた目標になってしまわないように、気をつける必要がある。例えば、「小数の筆算の仕方がわかるようになりたい」という目標を設定したとする。この目標では、具体的ではないため、振り返ることが難しい。自分が小数の筆算の仕方を理解したかどうかを、自分の感覚で振り返ることが予想される。そこで、「小数の筆算の方法を、ノートにわかりやすく書く」というような、具体性のある目標設定が求められる。

また、その時間に示された教科の学習目標の内容によっては、自己目標を設定することが難しい場合もある。そのようなときには、例えば、授業の最後に、本時の学習の理解を確かめる評価問題を数問出題したり、読み解いたことや今日知った用語を生かして一時間のまとめの文を書かせたりするなど、その時間の自己評価につながる様々な工夫をすることが考えられる。指導者は、振り返り活動を子ども任せにせず、自分の学習活動や成長の軌跡を的確に振り返ることができるように、目標設定の仕方を繰り返し指導する必要がある。

また指導者は、授業中、子どもたちに「自己目標」に立ち返らせるような機会を、意識して設け

ることが大切である。例えば、授業の途中に、「今日の目標を思い出してがんばりましょう。『字をきれいに書く』という目標を書いた人はどうですか。」というように、全体に声をかけるようにする。すると、「字をきれいに書く」という目標を書いた子どもにとっては、目標に立ち返る機会が与えられたことになるであろうし、そのような目標を設定していない子どもにとっても、字をていねいに書く契機になる。

自己目標を立てたときは、「その目標に向かって、今何をすべきか」ということを、いつも意識して行動することが大切である。そのことを、子どもたちに繰り返し伝えることで、自己目標の達成に向けて、自分の行動を軌道修正できる子どもを育てることができると考える。「目標を設定したからには、目標に向けて努力し、自分の態度や行動を修正していくことが大切である」ということを、子どもたちに伝えることが重要である。

### ③成功体験の振り返り

この枠は、本時の振り返りの場面で記入する。ここには、「自分がその一時間で理解できたこと、がんばったこと、学習の目標や自己目標に対してうまくいったこと」について書く。更に、「友だちの行動や発言、支援などで心に残ったこと、授業中に感動したこと」なども記入する。この枠は、子どもたちの成功体験を記すことが大きな目的である。ここでの内容は、自分や友だちの考え方や表現を称える内容であってほしい。「振り返りを記入する」というと、子どもや指導者の意識の中に、「改善点に注目しなければならない」という考えが生まれがちである。しかし、子どもたちの成長をよりよくうながす上で大切なことは、自分の成功体験を明らかにし、それを積み上げ、自身の成長を実感させることである。

この枠をはじめ、以降にある④、⑤の枠は、授業の終わりの「振り返りの場面」で記入することとする。

### ④改善点の振り返り

「わからなかったこと、困ったこと、難しかったこと」を書く枠である。子どもたちが的確に自分の現状をとらえ、ここに学習の困りを記入できるようになれば、指導者は、この枠に目を通すことで、子どもたちのつまずきや困りの実態を把握することができる。ただし、子どもたちにとって、自分は何がわからなくて、何に困りを感じている

のかということ、言葉で表したり説明したりすることは簡単ではない。その児童の記述力も、影響している場合があるからである。

また、この枠に書かれていた困りを見て、指導者が、一方的に更なる課題を児童に与えることが続くと、子どもたちは、正直に自分の困りを記入することに、メリットを感じなくなる恐れがある。子どもたちの記述内容を、「相談したいこと」と受け止め、どうすればその困りを克服できるかということ、まずはその子どもとよく話し合うことが必要である。その子ども自身が、自分の困りを克服するために必要な解決策を“選択”することができるように、相談活動を工夫することが大切である。

振り返りカードから、児童の実態を見取る際に気をつけることは、わかったこと、つまづいていることを記入する枠に目を通したからといって、子どもたちがその時間の学習内容を「十分理解できたかどうか」を評価できるわけではないということである。指導者は、子どもの現状や成長、伸び、がんばり、困りなどを把握するための一つの資料として、記述の内容を見ていく必要がある。

更に、共通した困りが複数の児童の振り返りに見られた場合は、次時の指導改善に生かしたり、指導者自身の反省に役立てたりすることが大切である。

## ⑤次時の目標設定

この枠は、次の時間にがんばりたいことや、次の時間までに克服したい課題を書く枠である。「次時の目標設定」を行うことで、次の時間への関心を高めたり、見通しをもたせたりすることにつながる。

次時の目標を設定する上で大切なことは、自己をより正確に理解し、その上で次の目標設定を行うということである。子どもたちは、ここまでに、自分を客観的に見つめ、本時を振り返ることを経験している。自分のめざしている姿や学習状況を的確に振り返り、目標設定に生かしていくことが、ここでは求められる。

## ⑥生活とのつながり

この枠と次の⑦の枠は、単元の最終の時間に、単元全体を振り返って書く枠である。

「この単元で学習したことを、これからの生活でどのように生かしていくか」ということについて書く。「学習と生活とを結びつけること」が、生き方探究教育の重要な要素である。この枠への記

述を見ることで、子どもたちが、学習したことをどのように生活に生かそうと考えているのかが見えてくる。また、指導者が、授業中に意識して取り組んだ、「学習内容と生活とのつながりを感じさせる活動」が、子どもたちの意識の中にどの程度浸透し、理解されているかということを見る一つの目安にもなる。

## ⑦単元の振り返り

「単元の全般で、自分がどのような目標を立ててがんばったか」「その結果、どのような成長が得られたか」「次の単元には、どのような目標を立ててがんばるのか」ということを書く枠である。単元の終わりにカードを見返して、過去の自分を見つめ、自分の成長やがんばり、友だちの良さに気づき、それらを肯定的に振り返ることは、次時への学習意欲につなげるためにも大切である。

単元の終わりは学習の終わりではない。次の学習に向けて、意欲を継続させるためには、ここに記述する内容を考えることに、大きな意味がある。この単元で克服できなかった自己目標を、次の単元で克服できるように、決意を固める場合もあるし、この単元でできるようになったことを生かして、次の単元でがんばりたいことを、設定する場合もある。単元だけではなく、学期や年間を通しての見通しや目標を意識させる機会としても、「単元の振り返り」を行うことには意義がある。

振り返りの方法やカードの形式については、ここで紹介した振り返りカード以外の方法も考えられる。ノートやワークシートに枠を設定したり、選択肢を使った振り返りを行ったりするなど、振り返りの方法については、クラスの実態に合わせて工夫していくことが望ましい。

次章では、四つの実践を紹介する。実際にどのような活動を採用入れて実践を行ったのか、そのことによってどのような子どもたちの姿が見られたのか、また、振り返りカードの実際の記述内容にどのような分析を加えたのかということについて述べる。

(28)河野由佳『京都発！確かな教育実践のために 17「未来の樹を育てる 生き方探究教育（キャリア教育）」』京都市総合教育センターカリキュラム開発支援センター 2010.3 p.10

(29)文部科学省『小学校キャリア教育の手引き』2010.1 p.61

(30)前掲(29) p.62

(31)京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画 第4学年』2005.3 p.4-理-21

(32)前掲(29) p.62

### 第3章 生き方探究教育の視点を踏まえた 教科学習の実際

第2章で提示した考え方にに基づき、第5学年で算数科、第4学年で算数科と理科、第2学年で国語科の実践を行った。本章では、学習指導案に示した生き方探究教育の視点を、実際の授業の中でどのように踏まえて指導を工夫したかということについて示す。

#### 第1節 教科学習のモデル例

##### (1) 第5学年算数科「ならした大きさ（平均）」 の実践の様子

本単元（全4時間）の目標は、以下のとおりである。

- 集団の特徴を表す値として平均を用いる良さに気づき、進んで活用しようとする態度を育てる。
  - 平均の考えを用いて、統計的に考察したり、表現の仕方を工夫したりするようにする。
  - 集団の特徴を表す値として平均を求めたり、活用したりできるようにする。
  - 平均についての意味、見方や調べ方を理解できるようにする。
- (33)

ここでは、身近な“ならす”という活動を通して、「平均」という新しい概念を知り、平均の求め方や、平均を活用して、課題解決を行う方法を習得する。

##### ◎考えの根拠を明らかにする活動

###### ～「意思決定能力」の育成に向けて～

本実践の中で、意思決定の力の育成に向けて重視したことの一つは、「根拠をもって課題解決に向かう」ということである。課題解決に取り組む際、自分がなぜそう判断し、解決に至ったのかという、“考えの根拠”を意識することが、意思決定能力を高める上で重要であると考えた。

実践では、根拠をもつことを意識させるために、個別の課題解決の時間を十分確保するようにし、「自分の考えをノートに記述すること」を、その方策として位置づけた。記述する際、絵や関係図、線分図などを活用し、わかりやすい表記をめざすように指導した。頭の中で考えていることを言葉や図で表す作業は、自分の考えを検証する力を育む上でも、有効であると考えた。

単元の1時間目に、子どもたちは、色水のかさをならすという活動を通して、平均の求め方を考えた。平均を算出した後、どのような根拠を

もって、その答えを導き出したのかということ、図の3-1のようにノートに記述していた。

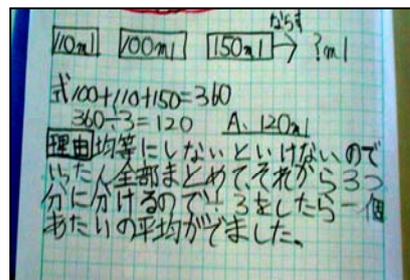


図3-1 平均の計算の仕方について書いたノート

ノートに考えを記述する

ときには、図や絵、関係図、線分図などを活用するほかに、二つの工夫を加えるように、子どもたちに伝えた。一つは、立式する際に、図3-2のノートのように、「数字が何を表しているのかということ

を、言葉で示す」ということである。そうすることで、式をどのような考えで立てたかということ、を、明らかにすることができる。

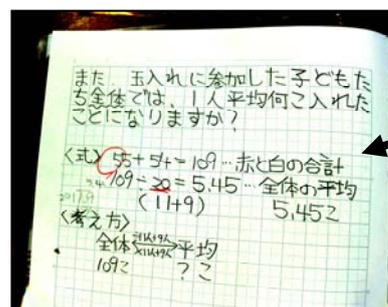


図3-2 式の数字に説明を加えたノート

もう一つは、図3-3のように、「たとえ自分の考えが間違っていたとしても、その間違いを消してしまわない」ということである。ノートに間違いを残しておくことで、自分の考えの足跡をたどることが可能になる。

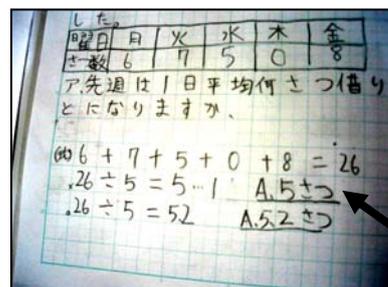


図3-3 間違いを消さずに残したノート

また、課題解決に取り組む際には、子どもたちの考えの足がかりとなるようなものが必要となる。そこで、課題設定の場面では、考えのヒントとなる情報を提示するように心がけた。子どもたちは、そこで示された既習事項や図などの中から、自分の考えの根拠となるものを選択し、それを活用して考えを記述することができていた。自分の力で主体的に解法や根拠となる事項を選択しながら解決に向かう力は、算数科で育むことのできる意思決定能力の一つであると考えた。また、そのような工夫を学習活動に加えることで、課題解決力の育成に有意義な学習活動を設定することができるようになる

と考える。根拠を明らかにして自分の考えを説明する活動

は、他教科でも実践することが大切である。それは、自分の考えを書くことにより、自己の判断や決定を、客観的に振り返る力が身につくからである。そのことは、子どもたちの判断力を高めることにつながると考える。

### ◎生活と学習とを結びつける活動

#### ～「情報活用能力」の育成に向けて～

情報活用能力の育成を念頭において、生き方探究教育を実践する際、「生活・社会」と「学習」とを結びつける視点は、社会と自分たちの生活とのつながりを感じたり、学習したことを生活に活用する力を育んだりする上で、大切である。

1時間目の学習では、日々の生活で行っている“ならず”という行為と、これから学習する「平均を求める式(全体の和÷個数)」とが結びついていることを、実感として理解することが大切であると考えた。そこで、図3-4のように、ペアになって、かさの違う色水の入った三つの試験管のかさをならすという操作活動を行った。



図3-4 試験管の色水のかさをならす活動

平均という新しい概念を、より身近なものとしてとらえ、興味をもったり、学習する意義を理解したりできるようにするためには、“ならず”という体験と学習とを結びつけることが重要である。平均を求める式を覚えるだけの学習では、体験を伴った深い理解にはなり得ない。「体験して得た情報」を活用し、「平均を求める式」を自ら導き出すことが、重要なのである。

2時間目の終わりには、学習と生活を関連づけるために、『『平均』がつく言葉を聞いたことがありますか。』と、子どもたちに尋ねた。子どもたちからは、「平均気温」「平均点」という声が上がった。そこで、指導者はクラスの算数テストの平均点を提示するなどして、身の回りで活用されている平均について紹介した。

振り返りの時間に、「今日の学習の中で、自分の生活に生かすことができそうなことがあれば、書いてみてください。」と声をかけた。それを受けて、ある児童は次のように記述した。

自分のテストの点の平均を出して、どれくらいの点をいつも出せているかということなどに(平均を)生かしてみたい。 ※( )内は筆者によるもの

この子どものように、「自分の学習していることは、身近な生活の中で活用することができる」ということを、多くの子どもたちがとらえられるように授業展開を工夫することが大切である。

単元の4時間目には、発展的な内容として、「平均を活用する時間」を設定した。活動の内容は、「自分の歩幅の平均を算出した後、その歩幅を活用して体育館の横幅やステージの幅などを測る」というものである。

まず、教室で、歩幅の平均を出す方法をプレゼンテーションソフトやワークシートを通して説明した。次に、体育館に移動し、巻尺



図3-5 自分の歩幅の平均を調べる活動

を利用しながら、図3-5のようにして、自分の歩幅を測る活動を行った。指導者は適宜、相談活動を行い、クラスの全員が自分の歩幅を算出できるように支援していた。

この活動を行う際に大切なことは、子どもたちが事前に、「自分の歩幅を調べる意義」を十分に理解して活動するということである。そのことにより、子どもたちは歩幅を調べることに目的をもち、主体的に取り組むことができるようになると考えられる。このことでも、生活と学習とのつながりを意識した視点が生かされる。子どもたちの感想には、次のような記述が見られた。

- ・ものさしがなくても、長いところは歩はばで測ってやったらいいなと思った。
- ・どこかを測ってとお願いされても、足で測るものがあるから、そこで使える。
- ・歩はばがわかれば、家の長さがわかるのでやってみたい。

「学習したことを生活に生かすことができた」という子どもたちの喜びが、記述からうかがえる。実際に、授業後に体育館から教室まで戻る間、友だちと歩数を数えながら歩く子どもたちの姿が見られた。その子どもたちは、教室に入るなり計算機を手にし、その歩いた距離を算出して、「先生、体育館から教室までは45mくらいやった。」と、嬉しそうに指導者に報告していた。

この実践を通して、学習したことを生活に生か

すという視点をもち学習活動を工夫することにより、子どもたちの学習意欲を引き出すことができるということ、実感することができた。

## (2) 第4学年算数科「はしたの大きさの表し方を考えよう(小数)」の実践の様子

本単元(全9時間)の目標は、以下のとおりである。

- 日常生活の中で、小数が用いられる場面に関心を持ち、小数を用いる良さに気づき、進んで生活に生かそうとする態度を育てる。
- 小数の意味と表し方及び計算の仕方について、整数の場合の考え方から類推して考えられるようにする。
- 端数部分の大きさを小数で表したり、小数のたし算・ひき算の計算をしたりすることができるようにする。
- 小数の意味と表し方及び小数のたし算・ひき算の意味と計算の仕方を理解できるようにする。(34)

ここでは、小数という新しい数の表し方について、その表記の仕方や数の大きさ、構成などを学習する。また、整数の場合から類推して、小数のたし算、ひき算の仕方や、小数の筆算の仕組みを理解し、習熟を深める単元である。

### ◎自己の能力に応じた学習課題を選択する活動 ～「意思決定能力」の育成に向けて～

意思決定能力の育成に向けて、単元の終盤に、習熟の度合いに合った課題プリントを子どもたち自らを選択して取り組むという学習活動を採り入れた。

本単元では、7、8時間目に復習の時間を設定した。学習内容別に学習プリントを5種類作成し、どのプリントに取り組むかを、子どもたちが選択できるようにした。表3-1は、それぞれのプリントの内容をまとめたものである。

表3-1 各学習プリントの問題の内容と問題数

プリント番号	問題の内容	問題数
プリント①	リットルますに入っている水のかさや、テープの長さを、小数で表す問題。	7題
プリント②	○m○cmを小数を使って△mで表すといった、長さ、重さやかさの「単位換算」の問題。	8題
プリント③	「2.5は1を○こと、0.1を△こ集めた数です。」というように、小数の大きさに関わる問題。	8題
プリント④	筆算を含めた、小数のたし算、ひき算の問題。	20題
プリント⑤	上の問題が網羅されているテスト問題に近似した問題。(①～④の全てのプリントが終了した子どもが、取り組むことができる。)	30題

指導者は、子どもたちがプリントを選択する前に、その内容を簡単に説明した。選択する際には、各自の振り返りカードやノート、教科書など、自分の学習の足跡を振り返ることができるものを見返して、自分の苦手としている内容や、つまずきのある内容を把握した上で、選択するようにながした。子どもたちの振り返りカードには、自分がわからなかった問題の種類や問題番号を記しておくように伝えていたので、多くの子どもは、時間をかけ過ぎることなくプリントを選択し、意欲的に取り組むことができていた。

また、指導者は「問題を解くスピードを競うのが今日の学習の目的ではないこと」を次のように子どもたちに伝えた。

「自分の苦手なことを克服するのが、この時間の目標です。自分はこういう問題が得意なんだとか苦手なんだとか、そういうことを知ってわかるようになることも、今日の学習の大切な目標です。周りの人と、問題を解く速さや解いたプリントの枚数を競ったり比べたりする必要はありません。」

子どもたちは、自分の設定した目標の達成に向けてプリントを選択し、学習を進めていた。指導者は、事前に子どもたちの実態を把握しておき、焦点を当てた子どもには、個別に相談活動を行った。その上で、どのプリントに取り組むかを、その子どもと一緒に決定していた。

プリントを選択した子どもたちに、なぜそのプリントを選んだのか質問した。すると、「この前、単位を換える問題ができなかったから、このプリントを選びました。」「ほかのは大丈夫だし、一番苦手なこれ(単位換算のプリント)を選びました。」というコメントが返ってきた。これらのことから、子どもたちが自分なりの根拠をもって、プリントを選択していることがわかった。

選択したプリントができた子どもは、「答え合わせコーナー」まで持って行き、自己採点を行った。そして、採点したプリントを指導者に見せ、チェックを受けた。指導者は、どの子どもがどのプリントに取り組んでいるのかを把握し、採点の様子から子どもたちのつまずきを見取ることができた。

次のプリントを選ぶ際、もし自己採点したプリントの正答率が悪かった場合は、同じプリントに再び取り組んでもよいこととした。解けなかった問題を、自分の課題として設定し、取り組むことが大切であると考えたからである。

自分で設定した課題の解決に向けて、繰り返し同じプリントに取り組んでいる子どももいた。子

どもたちからは、「やっと間違わないで全部できた。」  
「先生、3回目は全問正解やったよ。」と喜ぶ声を聞くことができた。

これらのことは、子どもたちの課題設定力を育むことにもつながる。

また、問題の解き方がわからない子どもや、自分の答えがなぜ間違っているのかわからない子どもは、図3-6のように、指導者に



図3-6 個別の学習相談の様子

個別の学習相談を受けていた。その後、新たなプリントに取り組むか、もう一度同じプリントに取り組むかを決定していた。

このように、算数科の各単元でよく行われるプリントを活用した練習の時間に、「自己選択」や「目標設定」という、生き方探究教育の視点を意識した活動を取り入れることで、集中して学習に向かう子どもたちの姿を見ることができたと考える。

以下は、授業の終わりに、子どもから聞いた感想と、振り返りカードに記述していた、感想の一部である。

- ・わからないところもあったけど、自分がどれだけできたのかがわかってうれしかったです。
- ・しっかり直しをして、また直しがいっぱいあったのはもう一回やった。
- ・自分の苦手な問題がわかってよかったです。とても力になったように思いました。

この記述から、子どもたちはプリントをただ選択するだけではなく、自分の課題の克服という目標を設定し、根拠をもってプリントを選択していたことがうかがえる。そのことが、子どもたちの学習に向かう課題意識を引き出し、主体的な学習につながったと考えられる。

単元の最後の時間である9時間目には、課題別の学習のまとめを行った。提示された四種類の課題をコース名とし、その中から、子どもたちが自ら課題を選択して取り組む活動である。更に、子どもたちの主体性や目標を定める力、また、設定した課題を解決していく課題解決力を育むというねらいもある。

課題の内容及び実際に取り組んだ子どもたちの数は、次表3-2のとおりである。

表3-2 課題のコース名と内容、及び取り組んだ子どもの数

コース名	内容	人数
① 小数新聞	一枚の紙に、今まで学習してきたことを、小数を知らない人にもわかるように紹介する新聞を作成する。	5人
② 魔法陣	数枚の魔法陣の課題プリントを解いたり、自分で魔法陣の問題をつくって友だちと解き合ったりする。	9人
③ 小数で表そう	はかりや定規を使って、教室にあるものの重さや長さをはかり、その値を小数で表し、記録する。	1人
④ 二つのコップ	大きさのちがうコップを二つ使って、ある決められたかさをはかりとる。(例えば0.5ℓ 入るコップと0.2ℓ 入るコップを使って、違うコップに0.3ℓ のかさをはかりとる。)	4人

課題を選択する際には、なぜ自分がそれを選択するのかという理由を振り返りカードに書くこととした。そうすることで、「根拠をもって選択すること」が意識できるようになると考えたからである。ある子どもは、「まほうじんをして、計算をもっとうまくできるようになりたいからです。」という理由を挙げて、課題を選択していた。

自分の取り組むコースを決めた後、子どもたちは既習事項を活用して、課題解決に向かった。同じコースを選択した人と協力しながら進めてもかまわないこととした。図3-7のように、子どもたちは、楽しみながら意欲的に課題に取り組んでいた。そして、調べたことやわかったこと、解決する方法などを、ワークシートに記述した。



図3-7 「二つのコップ」の課題に取り組む児童

以下は、子どもたちがワークシートに記述していた、本時の感想の一部である。

- ・むっちゃおもしろかった。先生が本当に水の量が当たっているかチェックするときには、うまくできたかどうかドキドキした。
- ・一人でがんばってできたのがうれしかった。
- ・まほうじんをといたおかげで、前よりもたし算がはやくなった。

自分の選択した課題の解決のために、生き生きと学習を進めている子どもたちの様子が、この記

述からもうかがうことができる。

目的意識をもって学習を進めるためには、根拠をもった選択が求められる。しかし、学習プリントや課題コースを選択する際に、その根拠が、「なんとなくおもしろそうだったから」というあいまいなものになってしまう子どもも何人かいた。そこで、学習プリントや課題の選択の前に、「お試し時間」を設けたり、活動の途中で「課題チェンジの機会」を設けたりするなど、子どもの実態に合わせた「進め方の工夫」が必要であると感じた。

以上のことから、自己選択、課題設定を採り入れた活動が、子どもたちの主体性を引き出す上で、有効であることがわかった

### ◎相手にわかりやすく自分の考えを伝える話し合い活動 ～「人間関係形成能力」の育成に向けて～

本実践では、ペアやグループ、クラスという様々な形態で話し合い活動を行うことで、人間関係形成能力を育成することとした。子どもたちの事前アンケートでは、「授業中、みんなの前で発表することをがんばりたい。」と回答している子どもが多いことがわかった(7人/20人中)。また、毎時間行う目標設定でも、「手を挙げて発表できるようになる。」「〇回は発表する。」「みんなの前で、わかりやすい発表ができるようになりたい。」というような、“発表に関する目標”が多かった。そこで、指導者と相談し、話し合い活動の充実を意識しながら、単元を進めることとした。

よりわかりやすい発表をめざして、「根拠を明らかにすること」と、「発表の仕方を工夫すること」を、子どもたちが意識できるようにした。また、ハンドサインによる意思表示については、以前から学級で取り組んでいたため、全体の話し合いの場面では継続して活用することとした。「よくわかる」「同感」「正しい」はグー、「わからない」「質問」はチョキ、「もう一度言ってほしい」は人差し指、「ほかの意見」「間違っている」はパーを挙げる約束である。

指導者は、ハンドサインを活用しながら、全体での話し合い活動を進め、課題解決に迫る考えを、全体で共有できるように心がけた。

話し合い活動を充実させるためには、各個人が自分の考えをもち、話し合いに参加することが大切である。先にも示したように、「根拠を明らかにすること」の大切さを、繰り返し子どもたちに伝え、ノートには、必ず考えの根拠や立式の説明を言葉や図で示すようにうながした。

「発表の仕方の工夫」については、はじめに“自分の考え”を述べ、次に、「なぜなら」という言葉につなげて“考えの根拠(理由)”を述べるという話型を提示した。

また、図3-8のように、自分の立つ位置や目線、指さし、声の大きさなど、よりよい発表に向けた工夫についても、子どもたちの実態に合わせて適宜指導した。



図3-8 指で示しながら説明する児童

振り返りカードに、「〇〇さんの発表がとてもわかりやすかった。」という記述があった際には、次の時間にそのコメントを紹介することで、どのような発表がわかりやすい発表なのかという見本として提示した。このように紹介することは、コメントを書いた子どもと紹介された子どもの喜びになると同時に、積極的に友だちの良さを見つけようとする、「発表の聞き方」についての視点を与えることにもつながった。

以下は、話し合い活動をした後の感想の一部である。

- ・前は説明するのができなかったけど、人の説明を聞いていたらできるようになりました。
- ・前は答えの理由がうまく言えなかったし、手もあげられなかったんだけど、この小数の時間で、手をあげられるようになったし、理由もうまく言えて、自分に自信がもてました。
- ・〇〇さんの方法でやってみると、とてもわかりやすかったのうれしかったです。

これらの感想から、子どもたちが、話し合い活動に進んで参加し、自己実現を果たすことができたことを読み取ることができる。

### (3) 第4学年理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」の実践の様子

本単元(全7時間)の目標は、以下のとおりである。

- 閉じ込めた空気及び水に力を加える活動を通して、そのかさや押し返す力の変化を調べ、その変化によって起こる現象をそれぞれの性質と関係づけて追究する能力を育てるとともに、空気及び水はそれぞれ違った性質があるという考えをもつようにする。(35)

ここでは、様々な体験活動や、筒の中に閉じ込めた空気や水を圧す実験を通して、閉じ込めた空気や水の性質を調べていく。

◎課題を設定し、実験方法を選択する活動  
～「意思決定能力」の育成に向けて～

意思決定能力の育成に向けて、単元の中で、子どもたちが試行錯誤を繰り返しながら実験に取り組み、その結果をクラスで共有することで理解を深めるという活動を二回行った。

一回目は単元の4時間目に行った。この時間の学習目標は、「空気でっぼうの玉を遠くに飛ばすには、どうしたらいいか考えよう」である。子どもたちは、空気でっぼうに使う玉の材料を変えたり、飛ばし方に工夫を加えたりしながら、より遠くに飛ばす空気でっぼうのつくり方を考える。そして、「なぜよく飛ぶのか」という理由を明らかにすることで、閉じ込めた空気の性質に迫っていく。

まず、子どもたちに、栓の材料として、ジャガイモ、スポンジ、紙粘土、わた、ちり紙を提示した。そして、どの材料が空気でっぼうの玉としてよく飛ぶのかという予想を立てることとした。予想では、ジャガイモやスポンジが一番飛ぶという子どもが多かった。

次に、「飛ばし方の工夫」について考えた。飛ばし方の工夫としては、強く棒を圧す、ゆっくり圧すという二つの工夫を考えた。

「速く圧した方が玉は遠くに飛ぶ。」という予想が多かったが、「力をためなくてはいけないから、ゆっくり圧した方が遠くに飛ぶ。」と予想する子どもも5人いた。

その後、一人一人が自由に材料を選び、実験を開始した。図3-9のように、子どもたちは興奮した様子で、うれしそうに玉を飛ばしながら、感じたことや発見したことを声に出していた。「やっぱり、速く棒を動かした方がよく飛ぶね。」「わた」は全然飛ばへん。」「スポンジが一番飛ぶ。」「空気がもれると、飛ばないんやね。」など、今後の学習で大切にしたい言葉が、教室のあちこちから聞こえてきた。



図3-9 空気でっぼうの実験をする児童

実験を通して発見したことや感じたことを、ノートに記録するように伝えた。ある子どもは、「ぼうを動かす“はやさ”は、はやくしたほうがよくとぶ。あと、わたしはとばなかったけど、それがいものものはすごくとびました。一番とんだのはスポンジでした。」というように、わかったことをノ

ートに記録していた。その後、クラスで記録したことを発表し合い、「閉じ込めた空気の性質としてどのようなことがわかるか」ということについて、クラス全体で交流し、学習のまとめを行った。

子どもたちが実験に取り組む様子から、「試してみたい」「予想を確かめたい」という意欲を感じることができた。その意欲づけには、自分が選択・決定した方法で、工夫を加えながら活動するという、「自己決定」の部分が大きく関わっていたと考える。

「より遠くに飛ばす空気でっぼうをつくる」という目標の下、自由に試行錯誤できる活動の場を設定することで、子どもたちは目標に向かって、のびのびと主体的に活動することができていた。活動の中で体得したことは、子どもたちの学習理解につながり、教科の学習目標を達成する上でも有効であったと考える。

二回目は、単元の終わりの6、7時間目に行った。「閉じ込めた空気や水の性質を調べる四種類の実験」の中から、一番取り組んでみたい実験をグループ（生活班3～4人）で選択するという、「自由実験」の活動を設定した。学習の進め方としては、まず、実験方法を選択して準備物などを確認し、次に、実験方法や結果をグループで相談した上で実験を行い、最後に、実験から明らかになったことを、全体に発信して交流するという流れで進めた。

子どもたちに提示した実験内容と、どのグループが実験に取り組んだのかを、表3-3に示す。

表3-3 自由実験の実験名と内容及び、取り組んだグループ

実験名	内容	取り組んだグループ
ふん水の実験	ペットボトルに半分くらい水を入れ、筒を二本取り付け、一方から息を吹き込むと、片方から水が飛び出る仕組みについて調べる実験。	1班
ちゅうしゃきでっぼうの実験	注射器型のシリンダーに水を入れたり、ものを先に詰めたりして、ものの飛び方などを調べる実験。	2班 3班
落ちない水の実験	三角ビーカーの口に漏斗を取り付け、漏斗に水を入れても水が落ちないことを確かめた上で、漏斗や入れる水の量を変えながら、落ちない理由について考える実験。	4班
よく飛ぶ水でっぼうをつくる実験	筒を利用して、より遠くに飛ばす水でっぼうをつくる実験。	5班

子どもたちは、取り組む実験を自己決定することにより、意欲的に実験に取り組むことができていた。準備物を家から持ってきたり、「ゴム栓とビーカーを

貸してください。」と指導者に頼んだりして、主体的に材料を集めている姿が見られた。グループで相談し、解決の方法を考えながら協力して課題に向かうという経験をするのは、子どもたちの課題解決力や計画力を高める上で有効であるといえる。また、その力は、ほかの教科等や、係活動などの常時活動でも生かすことのできる力であると考え。

実験のまとめの時間には、各グループの代表者が、実験を通してわかったことを発表した。その結果についてクラスで話し合い、考察・検証を加え、単元のまとめにつなげることができた。「『自由実験』に取り組んでみてどうでしたか。」と子どもたちに尋ねたところ、「自分たちで実験できて、とても楽しかったです。もう一度するときには、『噴水』の実験をしたいです。」というように、前向きな声を多く聞くことができた。

振り返りカードの「実験に関する感想」には、次のような記述が見られた。

#### 注射器でっぽうグループの児童

実験で何が飛びそうとか予想して物を選ぶのをがんばりました。わくわくプラン（夏休みの自由研究）で、続きをやりたい。

#### 噴水グループの児童

最初は空気が入って、ブクブクなって（水が）出なかったけど、手で空気が入らないようにしたら出きました。

#### 落ちない水グループの児童

2.5cmのゴムせん（水）を1cm入れると、水はながれていった。1.5cm入れると、ポツポツ落ちていった。2cm入れると1てきも落ちなくなった。空気が入るとすぐに水が落ちた。 ※（ ）内は筆者によるもの

このように、子どもたちが実験方法を選択し、試行錯誤を繰り返しながら課題解決に向かう活動は、活動に取り組む様子や授業後の感想からも、子どもたちの主体性を高める上で有効であったと考える。

ある子どもは、「理科が好きになりました。」と感想に記述していた。実験で最終的に明らかにしたい内容は同じでも、そこに至るまでの道筋に自己選択・決定の機会が設けられていることで、実験の面白さが高まるということ、子どもたちの様子や実験後の感想から、推測することができた。

## ◎生活と学習とを結びつける活動

### ～「情報活用能力」の育成に向けて～

理科における実践でも、情報活用能力の育成に向けて、「学校や生活の中で体験したことを学習に

生かす」という視点を大切にしながら、学習の流れを考えた。単元の導入である1時間目は、閉じ込めた空気や水の性質を利用したもので、身近にどのようなものがあるかを尋ねた。子どもたちからは、自転車や車のタイヤ、水鉄砲、浮き輪、ポンプを押すと跳ねるカエルのおもちゃなどが出された。指導者は一例として、風船やボールなどの具体物を見せた。

次に、「空気を触ったり、感じたりしよう」というめあてで、二つの体験活動を行った。一つめの活動は、図3-10のように、大きな袋に空気を閉じ込め、閉じ込めた空気の感触を体感する活動である。

以下は、授業後に、子どもたちがカードに記述した感想の一部である。

- ・空気は何かにとじこめないと、かんじよくがわからないことがわかった。
  - ・空気はふわふわしたかんじよかった。クッションみたい。
  - ・空気をおすと、おし返された。
  - ・（袋に）あながあくるとすぐに（空気が）ぬけてしまった。
- ※（ ）内は筆者によるもの

この記述から、体験を通して閉じ込めた空気の性質の一つである「押し返す力」に、既に気づいている子どもがいることがわかる。

二つめの活動は、図3-11のように、水槽の水の中で空気の状態を確認するという活動である。子どもたちは活動を通して、「空気は水の中で泡として見ることができるといことや、「空気は、水の中では、上に上がろうとする」ということなどに、気づくことができていた。

二つの活動を通して、子どもたちは、今後の学習を理解する上で素地となる、以下のような知識や経験を共有することができたと感じる。

- ・空気を見ることはできないが、何かに閉じ込めると触ることができる。
- ・閉じ込めた空気がフワフワするのは、押し返す力があるからである
- ・しっかり閉じ込めていないと、空気はすぐにも



図3-10 空気を袋に閉じ込め体感する活動



図3-11 水の中で空気の状態を確認する活動

れてしまう。

- ・水の中では空気が泡となって目に見え、そこに空気があるということがわかる。

ある子どもは、「空気や水は身近にあるのに、こんなにすごい力をもっていたなんて知らなかったの、すごいと思いました。」という感想を振り返りカードに記述していた。感動を伴った体験は、生きた知識として、子どもたちの中にいつまでも残る。それは、今後、閉じ込めた空気について理解を深めるときに生きてくると考える。

#### (4) 第2学年国語科「だいじなところに気をつけて読もう『サンゴの海の生きものたち』の実践の様子

本単元(全11時間)の目標は、以下のとおりである。

○海の中の生き物の様子を想像しながら読み、説明の順序に気をつけて、生き物の関わり方について大体的な内容を読むことができるようにする。

○海の生き物の様子や関わり方について調べ、紹介文に書くことができるようにする。(36)

ここでは、教材文『サンゴの海の生きものたち』を通して、海の中で関わり合いながら暮らす生き物たちの様子を読み取っていく。その後、自分が興味をもった海の生き物についての紹介文を書き、クラスで一冊の「海の生き物図鑑」にまとめるという単元の流れである。

#### ◎読みのめあてを選択したり、図鑑に載せる生き物や内容を決定したりする活動

##### ～「意思決定能力」の育成に向けて～

単元の2時間目には、意思決定能力の育成に向けて、自分たちで話し合っ読みのめあてを設定するという学習を行った。進め方としては、まず、グループの中で順番を決めて、一人ずつ順番に本文を読み進める。次に、指導者の範読を聞きながら、「不思議に思ったところ、よく意味がわからなかったところ」に『?』マークを、「おもしろいと感じたところ」に『お』マークをつけるようにする。そして、マークをつけた文をクラスで発表し合い、その発表された文から、これからの学習の中で明らかにしていきたいことについて話し合い決定する。それらを、クラスの「読みのめあて」として、最終的に設定する。

このような、本文にマークをつける活動や、クラスで読みのめあてを決定する活動を通して、子どもたちの意思決定能力を高めることができると考えた。

実際の授業では、子どもたちは何度も本文を読み返しながら、マークをつける活動に取り組んでいた。マークをつけた文を発表するときは、必ず「なぜその文にマークをしたのか」という根拠を発表するように、子どもたちにうながした。「私は、『かかわり合っ』という意味がよくわからなかったの、『?』をつけました。」というように、子どもたちは次々と自分のマークをつけた文を発表していた。出された意見を基に、読みのめあてを指導者とともに決定した。最後には、教材文全体を通して明らかにしていく読みのめあてとして、「どのような海の生き物たちが、どのようなかかわり合いをしているのだろう。」というめあてが決定した。

子どもたちは、その後、決定した読みのめあてを明らかにしていくことを通して、教材文を読み深めていくことになった。読みのめあてを、自分たちで話し合っ決める活動は、子どもたちが主体的に学習に向かうために、有効な方法であるといえる。

単元の7時間目には、生き物図鑑に自分が紹介したい生き物を選び、一人一人決定していった。その際、自分がその生き物をどのような理由から選んだのかということ振り返り、カードに記すようにした。以下、振り返りカードに記述した、選択理由の一部である。

##### サバビーを調べる児童

600万いじょうのたまごをうむところがすごいと思ったからです。

##### エイを調べる児童

ヒレの下のところを見たことがなかったので、くわしくしらべたいと思ったからです。

##### テッポウエビとハゼの関わり合いを調べる児童

かかわり合っ生きていることをしらせたかったから。

このように、生き物の紹介文を書くときに選んだ根拠を明らかにしておく、「特にどの部分を読み手に伝えたいのか」ということがはっきりする。

根拠をもって生き物を決められなかった3人の子どもたちについては、個別に相談活動を行うことで、全員が生き物を決定することができた。根拠を明らかにして選択するという事は、紹介文を書くときの重要な支援にもなると考えることができる。

#### ◎付箋紙を使って、情報を収集したり考えを整理したりする活動

##### ～「情報活用能力」の育成に向けて～

情報活用能力の育成に向けて、付箋紙を活用しながら、文中に登場する海の生き物たちの関わり合いについて自分なりに考えて読む時間を、4、5

時間目に設定した。4時間目はクマノミとイソギンチャクの関わり合い、5時間目はホンソメワケベラと大きな魚たちの関わり合いについて読みを深めた。また、6時間目には、「学習した関わり合いを、自分たちの生活に置き換えて考える」という時間を設定した。これらの4～6時間目の授業では、教材文や身近な生活から関わり合いを表す情報を収集するために、付箋紙を活用した活動を採り入れた。その実践の様子について紹介する。

4時間目に、付箋紙を活用して、クマノミとイソギンチャクとの関わり合いを表にまとめる学習を行った。まず、一人一人が、ピンクの付箋紙に「クマノミについて書かれている文」を、黄色の付箋紙に「イソギンチャクについて書かれている文」を書き出していった。子どもたちからの発案を受けて、「本文中にはないが、写真を見てわかること」も付箋紙に書いてよいこととした。また、文とともに、絵を描いてその文の説明をしてもよいこととした。指導者は、個別の相談活動を行いながら、全員の子どもが二枚以上は付箋紙に情報を書き込むことができるように配慮した。

次に、グループに画用紙を一枚準備し、そこに、一人一人が書いた付箋紙を色ごとに分けて貼っていった。同じ文を抜き出している場合は、付箋紙を重ねて貼るなど、整理の仕方は子どもたちが工夫していた。「これは、同じことだね。」「これって黄色の付箋紙に書くんじゃないのかな。」というように、相談しながら情報を整理し、グループでの話し合い活動が活発に行われていた。その後、それぞれの生き物について書き抜いたことを全体の場で次々と発表し、指導者が、図3-12のような一枚の模造紙に表としてまとめていた。

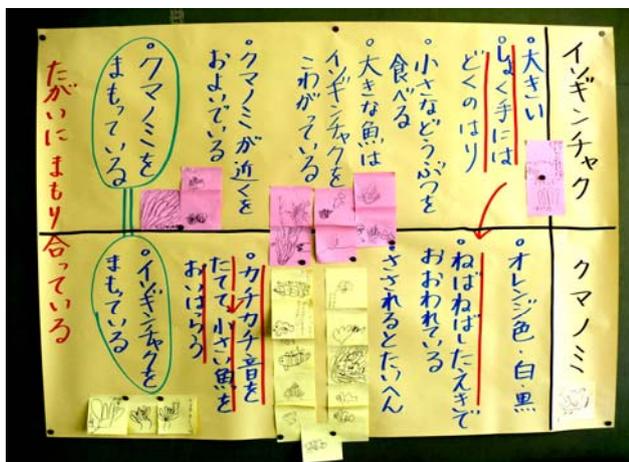


図3-12 クラスで意見を出し合い、作成した表

発表の場面では、子どもたちは次々と意欲的に

手を挙げて交流していた。一度付箋紙に文字として書いているという経験が、子どもたちの発表する意欲を高めた一つの要因として考えられる。

図3-13は、発表する際、自分たちが書いた付箋紙を見ながら発表している子ども様子である。このことから、自信をもって発表するためには、その支えとなるものが必要であるということ、改めて実感した。



図3-13 手元の付箋紙を見ながら発表する児童

また、自信をもって発表できたもう一つの要因としては、グループで話し合いながら考えを整理したことが挙げられる。「グループで考えた。」ということが自信となり、「発表したい。」という思いにつながったのだと考える。

5時間目、指導者は「前の時間に作成した表を、今度は一人一人で作成しましょう。」と、子どもたちに声をかけた。子どもたちは、「ホンソメワケベラと大きな魚」の関わり合いについて、前時のように付箋紙とノートを活用しながら、表を作成した。

子どもたちは、情報を抜き出し、整理する手段として付箋紙を上手に活用し、ノートに、図3-14のような関わり合いをまとめた表を作成していた。

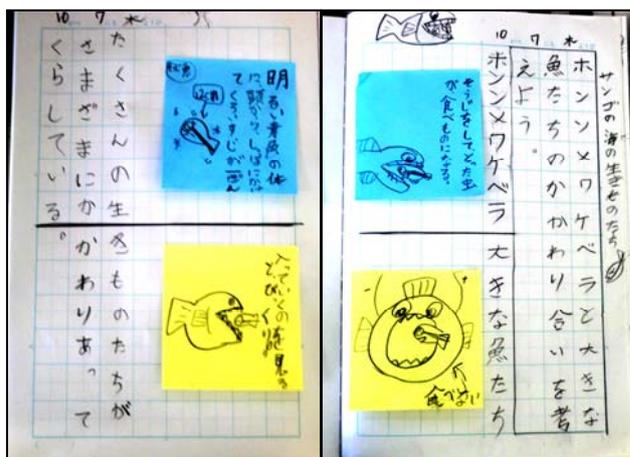


図3-14 付箋紙を活用して関わり合いをまとめた表

前時に学んだことを生かして課題解決をめざす活動は、情報活用能力を高める上で大切である。

単元の6時間目には、今まで学習してきた「海の生き物たちの関わり合い」を、自分たちの生活に置き換えて考える時間を設定した。自分の生活の中にある、自分と他者との関わり合いを作文にま

とめるという活動である。

子どもたちは、学習を進めていく中で、海の生き物たちの関わり合いというのは、「守り合い」であったり、「助け合い」であったりすることを学んでいる。そこで、だれかと守り合ったり助け合ったりした体験を想起し、作文のテーマとした。

まず、指導者が、「先生が皆さんに勉強を教えたり、困っているときに話を聞いたりする代わりに、先生は、皆さんから、元気をもらったり、一生懸命な気持ちをもたらしたりしています。それは、先生とみんなとの関わり合いだと思のです。」というように語りかけた。それから、「だれとの関わり合いについて書くか」ということを決めるように、子どもたちにうながした。子どもたちは、それを決めた後、自分がその人にしてもらっていること、自分がその人に行っていることを、色の違う付箋紙に書き出した。そして、その付箋紙をノートに貼って整理し、図3-15のようにしてまとめた。

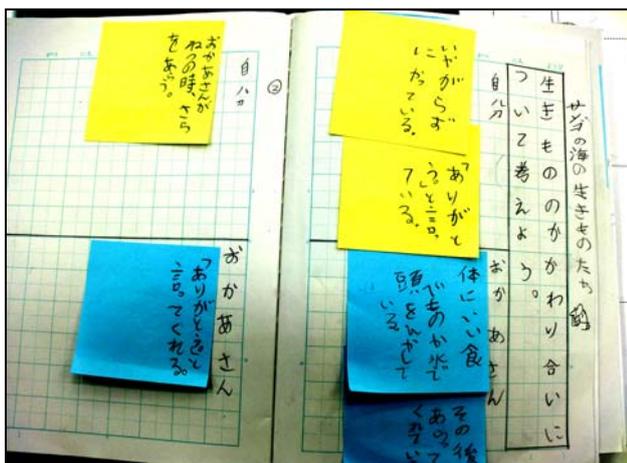


図3-15 付箋紙を活用して、情報を整理しているノート

その後、付箋紙を使って書き出した文をつなげて文章にし、原稿用紙に書き進めていった。

指導者は、「原稿用紙の書き方」の例として、模造紙に一つのモデル文を書き、黒板に掲示した。それを見ながら、子どもたちは書き方を確認していた。

個別の相談活動や、モデル文の提示などの支援により、この時間の終わりには、クラスの全員が作文を完成させることができた。子どもたちは、作文を書くという活動を通して、「関わり合い」は、自分たちの身近な生活の中にもあるということ、発見することができたと考える。

完成した作文は、交流ができるように、指導者が2枚のプリントにまとめて全員に紹介した。子どもたちが書いた作文の一つを紹介する。

ぼくは、〇〇くんとかかわり合っているとかんじました。それは、ぼくがこまっているときにかんじました。ぼくがこまっているときに、〇〇くんが自分がこまっているときみたいになんでくれたり、

「いっしょに考えよな。」  
など言ってくれたりしました。

これから、ぼくも〇〇くんのことを自分のことみたいに考えたいです。これが、ぼくと〇〇くんのかかわり合いだと思います。

この子どもは、友だちとの関わり合いについて作文を書いている。ほかには、母親や父親、先生、兄弟との関わり合いをテーマにした作文が見られた。

ある子どもは、この時間の感想として、以下のように記述していた。

かかわり合いは、人や魚やほかのどうぶつに、とても大切なことなんだなと思いました。

多くの子どもたちが、この子どものような感想をもち、「生き物の助け合いや関わり合いの大切さ」について気づくことができたと感じている。

付箋紙を使った情報収集・情報処理の方法を次の学習に活用したり、学習して学んだことを身近な生活と重ねて考えたりする活動は、子どもたちの情報活用能力を高めることにつながると考える。

### ◎他者との関わりや、自分の役割を意識した活動 ～「人間関係形成能力」「社会参画能力」の育成に向けて～

友だちと協力し合うことで、よりよいアイデアが生まれたり、課題を解決したりする経験を積むことは、子どもたちの人間関係形成能力を育む上で重要である。また、学級や学校という、大きな集団の中にいる自分の役割を認識し、他者との関わりを意識しながら行動することは、子どもたちの社会参画能力を育むことであると考えられる。この実践では、これら二つの能力の育成を視野に入れ、学習活動を次のように工夫した。

一つは、「子どもたちが、『海の生き物図鑑』を作成するときに、読み手を意識して作成に取り組むことができる状況を設定する」という工夫である。

本単元では、単元の出口で、海の生き物図鑑を作成した。その際、理科支援の先生に協力を依頼し、7時間目のはじめに教室へ来てもらった。そして、「自然や生き物に興味のある子どもが増えるように、T小学校のみんなが読みたくなるような、『海の生き物図鑑』をつくってほしいのですが、協力してもらえますか。」という内容の作成依頼をして

もらった。更に、「出来上がった図鑑をピロティに掲示したいと思っているので、読みやすい図鑑をお願いします。」と、図鑑を展示する場所を提供してもらおうとともに、「読みやすさ」という観点を示してもらった。

このように、「図鑑を意欲的に作成したくなるような状況」や「書くことの評価の観点」を意図的に設定することで、子どもたちは、作成する目的や相手意識をもちながら学習を進めることができた。このことは、紹介文を書き進める上で、よい動機づけとなった。

その後、振り返りカードには、次のような記述が多く見られるようになった。

**(児童の自己目標)**

- ・一年生でもよめるように書く。
- ・みんなが見やすく見られるように、きれいに書く。
- ・一年生から六年生までよめるようにていねいに字を書く。

**(授業後の感想)**

- ・一年生でもわかりやすいように書けた。
- ・点や丸をわすれずにつけて書けた。
- ・字がきたなくならないように気をつけて書きました。
- ・「は、を、へ」をまちがわずに書けた。
- ・かん字にふりがなをうつのに気をつけました。

読みやすさを意識することにより、文字や絵をていねいにかいたり、内容をわかりやすくするために読み返したりする活動が、「しなくてはならない活動」から、「進んでしようとする活動」になっていたと感じる。授業の中では、「みんなが読めるようになっていねいな字で書けていますか。」というように、指導者が声をかけていた。また、図3-16のように、ペアで紹介文を読み合い、感想を伝え合ったり、誤字や内容について助言し合ったりする活動を採り入れることで、子どもたちの相手意識を、更に高めることができた。



図3-16 ペアになって助言し合う児童

また、「作成の依頼を受ける」という状況設定を行うことにより、「T小学校の一員である」という集団への所属意識を、子どもたちはもつことができたと考えられる。「学級の枠を超えた、もっと大きな集団の中にいる自分」を意識しながら、自分たちにできること

を考え、行動したり、責任を果たそうとしたりすることは、「社会参画能力」を育む上で有効である。

この実践では、ペアやグループによる話し合い活動を授業の中に多く採り入れている。そうすることで、役割を分担する力や、話し合っ決めて力を身につけることができるようになる。また、人とのつながりを実感したり、役割を果たすことに喜びを感じたりする気持ちを育むことができるようになる。と考える。

先に述べた、「ペアで図鑑の文を読み合い、助言し合ったり感想を述べ合ったりする活動」のほかにも、以下のような活動を実践に採り入れた。

単元の3時間目には、クマノミとイソギンチャクの関わり合いについて読むことを目的とした、「役割読み」の活動を採り入れた。「役割読み」とは、グループの中で役割を決めて音読をするという活動である。グループの中で、クマノミ、イソギンチャク、ナレーションなど役割を分担し、グループで練習した後、音読発表会を行った。子どもたちは、役の動きを工夫したり、ナレーションに動きを合わせたりと、様々な工夫を加えながら活動を楽しんでいる様子が見られた。

「クマノミは音を出すんやで。だから、『カチカチ』って言うことにしよう。」「触手をゆらゆらしてるって書いてあるから、手をゆらゆらさせたらいいと思うよ。」というように、子どもたちはグループで相談しながら、本文の内容を動作化しようと練習していた。図3-17は、役割読みを練習する子どもたちの様子である。練習を進めていく中で、本文を正しく読もうと、何度も文章を指でなぞっている子どもたちの姿が見られた。



図3-17 「役割読み」の練習をするグループの様子

次の時間に、二つの生き物について書かれている文を付箋紙に書き抜く活動を行った。役割読みを通して、どの文が、何の生き物の様子を示している文なのかということ、子どもたちは正確に読み取ることができていた。

3時間目の終わりに、各グループで音読発表会を行った。少し恥ずかしそうにしながらも、自分の役割を、責任をもって果たそうとする様子が見られた。グループで決めた役割の重要性を理解した

上で、その責任を果たそうとする力は、集団適応力を高めることにつながると考える。自分や友だちのことを考えながら話し合い、役割を分担する経験を低学年から積んでいくことで、子どもたちのよりよいキャリア発達をうながすことができる。

7, 8, 11時間目には、グループでホワイトボードを活用した話し合い活動を行った。7時間目の話し合いのテーマは、「生き物図鑑に書く内容を考えよう」であ



図3-18 ホワイトボードにアイデアを書き出している児童

った。図鑑にはどのような内容が書かれているかということグループで調べた後、図3-18のように、ホワイトボードを使って、自分たちの図鑑に載せたらよいと考える項目を書き出した。

その後グループごとに、自分たちが出し合ったアイデアを発表した。その際、指導者は、ホワイトボードをさし示しながら、聞き手を意識して、わかりやすい発表を工夫するように声をかけた。

子どもたちは、体の向きや視線、さし棒の活用など、自分たちの意見をわかりやすく聞き手に伝えようと、図3-19のように、工夫をすることができていた。



図3-19 読み手を意識して、発表を工夫している児童

ここでも、発表する役、ホワイトボードを持つ役というように役割分担をし、それを認識しながら自分の責任を果たそうとする姿が見られた。

8時間目の話し合いのテーマは、「学校のみなが楽しめるような図鑑をつくるために、どのようなことに気をつけたらよ

いか考えよう。」であった。読み手を意識した工夫について、グループで話し合い、そのアイデアを、図3-20のように、ホワイトボードに書き出していった。

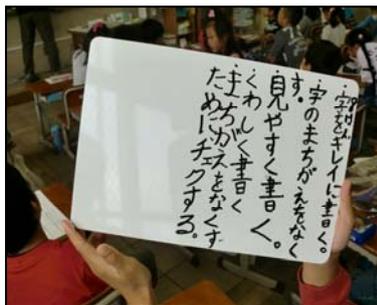


図3-20 ある班の、ホワイトボードに記述したアイデア

その後、グループごとに発表し、全体で気をつけることを、指導者が大きな画用紙にまとめた。話し合いの流し方は、7時間目で一度経験していることもあり、スムーズに進めることができた。

11時間目に話し合ったテーマは、「たくさんの人に、できあがった図鑑を読んでもらう方法を考えよう」である。出来上がった図鑑をどのように知らせ、展示の仕方を工夫すれば、よりたくさんの人に読んでもらえるかということについて、グループで相談した。

子どもたちは3回目のホワイトボードの活用ということもあり、話し合いは活発に行われていた。だれがホワイトボードに字を書くのか、だれが発表するのかということも、短い時間で決めることができた。話し合いの様子をから、「何のための話し合いか」ということを一人一人が十分に理解し、話し合いをすることで考えが深まることの喜びを感じている様子がうかがえた。

これらの話し合い活動を通して、子どもたちはアイデアを出し合ったり、話し合っって意見を決めたりすることの大切さや楽しさ、難しさなどを、実感することができた。

読み手を意識しながらつねいに作成された生き物図鑑は、その後、T小学校の玄関に展示されることとなった。休み時間になると、ほかの学年の子どもたちがたくさん集まり、図3-21のように、興味深そうに生き物図鑑を読んでいた。また、その様子を、少し照れくさそうにしながらも、うれしそうに見ている2年生の子どもたちの姿が見られ、微笑ましく感じられた。



図3-21 展示された生き物図鑑と、それを読む他学年の児童

11時間目の話し合いの中で出された、「給食放送で生き物図鑑を紹介したらいいのでは」という意見を基に、子どもたちは放送委員会に、図鑑を紹介してもらえるように、お願いをしにいった。後日、子どもたちが考えた放送原稿を委員に渡し、給食放送の中で生き物図鑑を紹介してもらった。子どもたちは、全校の人に自分たちの取組を発信できたという喜びとともに、責任をもって一つのことをやり遂げるこ

との「やりがい」を感じることができた。

話し合うことで違う考えに気づいたり、自分の考えを深めたりする経験を積むことは、人とのつながりを肯定的にとらえ、より積極的に人間関係を形成していこうとする意欲を高めることにもつながる。また、このような話し合い活動やグループ活動を通して、社会に参画する上で、社会における自分の役割を認識したり、集団に適応して活動することの大切さを学んだりする素地が形成されていくと考える。

教科の目標を達成するために、話し合い活動を日常的に採り入れることは、子どもたちの人間関係形成能力や社会参画能力を高めるという観点からも有効であると考えられる。

## 第2節 振り返りカードの分析と活用

### (1) 振り返りカードの分析

本実践では、子どもたちの自己実現を支援する方法として、振り返りカードを活用した。カードへの記述を分析する中で、教科学習で自己実現をめざす子どもたちの姿を具体的につかむことができたと考えられる。

実際に、どのような記述がされ、それをどのように分析したのかを、以下に報告する。4人の子どもの例を挙げて、事前に行ったアンケート調査とともに示すこととした。

### ◇5年生「A児」の場合

表3-4は、算数科「ならした大きさ（平均）」の単元の前に行った、A児のアンケートの結果である。

表3-4 A児の事前アンケートの結果

番号	設問	回答
①	今、学校でしている勉強は、将来社会に出たときに役立つと思いますか。	そう思う
②	今、あなたが勉強しているのはなぜですか。	将来、大人になったときに大切だと思うから
③	今、あなたが授業中にごんばりたいことは何ですか。	クラスの前で発表すること
④	あなたは、算数の授業が好きですか。	あまり好きではない
⑤	あなたは、計算することは好きですか。	好きではない
⑥	あなたは、自分一人の力で問題を解くことは好きですか。	好き

⑦	あなたは、文章問題を読んで、解き方を考えることは好きですか。	まあまあ好き
⑧	あなたは、グループで話し合っって問題を解くことは好きですか。	あまり好きではない
⑨	あなたは、クラスの前で話し合っって問題を解くことは好きですか。	好き
⑩	あなたは、クラスの前で自分の考えを発表することは好きですか。	好き

設問④、⑤の回答から、算数科に対して苦手意識があることがうかがえる。しかし、設問⑨、⑩の回答から、話し合ったり、発表したりすることは好きなことがわかる。今後、A児がどのような目標を立てながらこの単元の学習を進めていくのかを見ていくこととした。

以下は、A児の1時間目の振り返りカードの記述の一部である。

#### この時間にごんばりたいこと

はやくこの学習になれて、たくさん発表すること。

#### わかったこと うまくいったこと

平均の求め方がわかった。ごんばりたいことをクリアした。

#### 次の時間にごんばりたいこと

平均のことについて考えたり、発表をする。平均の問題をとけるようになる。

目標には、「たくさん発表すること」を挙げている。実際に、この時間A児は一回発表している。「“ならず”というのはどう意味かわかりますか。」という発問に、挙手して指名され、ご飯をよそったときに“ならした体験”を発表した。その後、考え方を発表するとき何度か挙手はするが、指名はされなかった。事前アンケートで、グループ活動は「あまり好きではない」と回答していたA児であったが、ペアでの活動は、相手と協力し合い、進んで活動している様子が見られた。その様子から、A児の前向きな授業態度を感じ取ることができた。

1時間目の成功体験の記述からは、自己目標に対する自分の達成度を客観的に振り返ることができていることがわかる。発表ができたことにより、満足した様子が見られた。また、次時の目標設定の記述を見ると、「算数の課題解決が苦手である」という意識から、このような目標を立てたのではないかと分析することができる。

2時間目では、平均の考え方を活用した課題解決に取り組んだ。発表に関しては、授業の冒頭で、「平均とはどのように求めたら良かったですか。」

という発問に対し、その求め方を発表している。全体的に、一時間目よりも挙手の回数が増えており、学習に向かう意欲の高まりが感じられた。この時間には、発表を三回行っている。二回目は、平均という言葉について自分の経験を発表し、三回目は、計算の答えに、なぜ「約」をつけなくてはいけないのかという根拠について説明している。

2時間目の成功体験の振り返りの枠には、次のように記述していた。

**わかったこと うまくいったこと**

全部の問題（平均の問題）が正解だった！がんばりたいこと、クリア。

この記述からは、課題解決に対する苦手意識を克服し、自己目標を達成できたことの喜びを感じることができる。

このように、目標に設定していた発表することが達成できたという「成功体験」を、他者と共有できることは、その子どもの喜びを深めることになり、自己肯定感を高めることにつながる。「成功体験の共有」は、振り返りカードを活用することによってできた例である。

ここまで順調に学習を進めてきたA児であったが、3時間目には困りが生じた。以下は、3時間目の「改善点の振り返り」の記述である。

**わからなかったこと こまったこと**

問題がむずかしくて、自力でとけなかった。

この記述からは、どの問題でつまづいたのかがわからない。難しかった問題や問題の番号を記しておくことで、振り返ったときに自分のつまづきを把握しやすいことを事前に指導することによって、より有効にカードを活用することができたと考えられる。

この子どもを含め、多くの子どもたちが、この課題につまづきがあることを把握できた。そこで、今回はその子どもたちに個別に対応するのではなく、その時間に行った課題と同じ内容の学習プリントを用意し、その日の家庭学習として全員に配付した。そして、4時間目に、採点したプリントを返却し、前時の振り返りをすることで、習熟を図るようにした。

単元の最終時である4時間目は、前時で学習したことを生かして自分の歩幅の平均を出した後、それを生かして距離を測るという、発展的な学習を行った。A児の自己目標は、「式が多くても、自力でできるかぎりの問題を解けるようにする」というもので

あった。歩幅の平均を出すことは、複雑な計算を伴うことになるが、活動に対して意欲的に取り組もうとする気持ちを、感じ取ることができた。

A児の様子を見ていても、積極的に活動に参加しようとする姿が見られた。自分の歩幅の平均を算出できたときには、晴れやかな笑顔もあり、ステージの幅や、体育館の横幅を調べる活動にも、進んで取り組むことができていた。この時間の成功体験の振り返りには、次のような記述が見られた。

**わかったこと うまくいったこと**

自分の歩はばがわかった。ステージや、体育館のはばもはかって、長さがわかった。

自分の歩幅を使うことで、実際の長さを測ることができたことは、大きな喜びとなったと考えられる。まとめで、指導者がメジャーを使って実際の長さを測り、それを子どもたちに伝えたと、A児も、「わっ、ほとんど一緒だ。」と、嬉しそうに友だちに話している姿が見られた。

A児は、この日に学習したことを生かして、「家までの長さがわかるのでやってみよう。」と感想に記し、学習が生活の中で生かすことができることに喜びを感じているようであった。

以下は、A児が、「単元の振り返り」に記した感想である。

平均のことをたくさん知って、自分の歩はばや、平均のまとめ方、合計のまとめ方を知ってよかったです。

自己実現に向かい、毎時間の学習に取り組みながら、少しずつ自己実現を果たしていくことで、A児は、「平均」という概念を自分の身近な生活に生かすことができることを理解できた。また、そのことが達成感や成就感を得ることができたことにつながっている。

**◇4年生「B児」の場合**

表3-5は、算数科「はしたの大きさの表し方を考えよう（小数）」の単元の前に行った、B児のアンケートの結果である。

表3-5 B児の事前アンケートの結果

番号	設問	回答
①	今、学校でしている勉強は、将来社会に出たときに役立つと思いますか。	そう思う
②	今、あなたが勉強しているのはなぜですか。	将来、大人になったときに大切だと思うから

③	今、あなたが授業中にがんばりたいことは何ですか。	自分の考えを書くこと
④	あなたは、算数の授業が好きですか。	まあまあ好き
⑤	あなたは、計算することは好きですか。	好き
⑥	あなたは、自分一人の力で問題をとくことは好きですか。	好き
⑦	あなたは、文章問題を読んで、とき方を考えることは好きですか。	好き
⑧	あなたは、グループで話し合っ問題をとくことは好きですか。	あまり好きではない
⑨	あなたは、クラスみんなで話し合っ問題をとくことは好きですか。	あまり好きではない
⑩	あなたは、クラスみんなの前で自分の考えを発表することは好きですか。	あまり好きではない

設問⑥、⑧、⑨、⑩の回答から、自力解決は好きだが、グループやクラス全体で話し合ったり、みんなの前で発表したりすることに、苦手意識をもっていることがうかがえる。

実際に、B児の授業の様子を観察していると、積極的に発言するわけではないが、指名された場合には適切に応答し、考えの根拠などもきっちり話すことができていた。学習に向かう姿は、大変まじめで、集中力を感じることができた。今後、B児がどのような目標を立てながら、この単元の学習を進めていくのかを見ていくことにした。

表3-6は、B児が設定した自己目標の記述を、時系列に並べて表示したものである。

表3-6 B児の自己目標の記述内容

時	B児の自己目標
1	学習目標をわかりし、できるようになりたい。
2	今日の目標の、「長さ重さでも、はしたの大きさを小数で表そう。」の問題をはやくとけるようにする。なぜなら、問題のとき方とかわからなくてとけなかったらおそくなるから。
3	どうなってそうなったか、考え方をわかるようにする。
4	自分の考えを書く。理由が言えるようにする。
5	ほかの人の考えを聞いて、自信をもって発表してみたいです。
6	小数のたし算・ひき算が完ぺきにできるようにがんばる。
7,8	全問正かになるようにがんばる。
9	まほうじんのやり方に早く“なれる”ようにがんばる。

これらの記述から、「どうしてそうなったか、考えをわかるようにする。」「理由が言えるようにする。」など、根拠をもつことの重要性は意識できていると考えられる。また、5時間目には、苦手としていた「発表」に関する自己目標を設定していることから、単元を通して徐々に自分の考えに自信をもち始め、「発表できるようになりたい」という、自己実現に向かおうとしていることがうかがえる。

B児は、実際の授業でも、自分が苦手とする「発表」に対して、「できるようになりたい。」という思いをもってチャレンジしていた。挙手する回数も、授業が進むにつれて増えていった。

単元の3時間目は、「小数の仕組みを整数の場合から考える。」という時間であった。課題解決の場面では、ノートに自分なりの考えを記述するようにながした。

3時間目のB児の振り返りには、以下のような記述が見られた。

わかったこと うまくいったこと

考え方がよくわかった。

わからなかったこと こまったこと

④の問題（単位換算の問題）が、説明がよくわからなかった。

次の時間にがんばりたいこと

説明をできるように問題を理かいしていきたいです。

※（ ）は筆者によるもの

自分なりの考えをもつこと、自分の力でノートに理由を書くことが、B児の当面の目標になっていることがこの記述から読み取ることができる。

4時間目は、整数の場合を想起し、数直線や位取りの表を活用しながら、小数のたし算、ひき算の仕方について考えた。子どもたちは、ノートに自分の考えを記述しながら、わかりやすい説明をめざして、話し合い活動を行った。B児は、図3-22のように、自分の考えを、ノートに意欲的に書いていた。

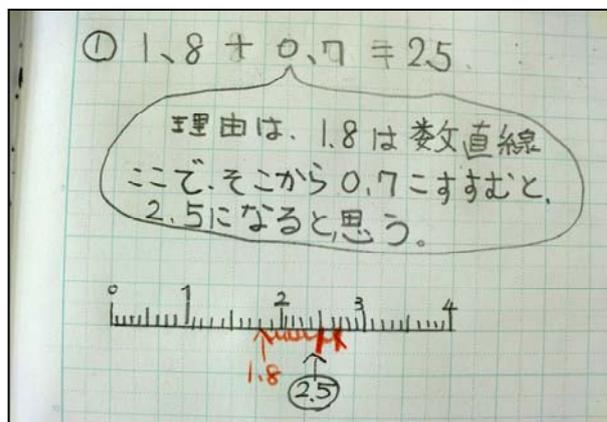


図3-22 B児のノートの記述

発表の際、ノートに記述した考えが相手にわかりやすく伝わるように、発表の仕方を工夫するように指導した。また、子どもたちの、「発表にチャレンジしようとする気持ち」をほめ、よりよい発表につながる支援を行うことで、「発表してみたい」という意欲を高めることができていた。

そのことが刺激となったのか、B児は4時間目の「次時の目標」に、以下のように記述した。

**次の時間にがんばりたいこと**

次は人の発表の仕方を見て、発表したいです。

5時間目は、「小数のたし算の筆算の仕方」を学習する時間であった。個別の課題解決の場面では、根拠をノートに書く時間を十分に取し、クラスでの話し合い活動を行った。その際、B児は苦手としていた「発表」にチャレンジし、考えを説明する場面で挙手をすることができた。発表には至らなかったが、挙手できたことに満足感をもつことができたようである。5時間目の振り返りには、以下のように記述していた。

**わかったこと うまくいったこと**

手をあげた。筆算の仕方がわかった。

単元における、B児のその後の様子を観察していると、挙手をする姿が見られた。

単元を振り返っての感想には、以下のように記述していた。

**この勉強をして、自分が成長できたことはなんですか。**

小数の表し方がわかってよかった。発表に手を挙げられた。(略)

発表はできなかったが、発表をしようと手を挙げられたことに、達成感を感じていることがわかる。また、振り返りカードに、以下のように記述していた。

**振り返りカードを書いてみて**

目標を書いたら、これにむけてがんばろうと思ってがんばれるから、カードを書いてよかったです。1時間目とかのを見て、「わかったこと」の言葉を見たら、自分がこうやってわかっていったというのが、すごくよくわかりました。

この記述から、振り返りカードを活用することで、B児が自己目標に向けてがんばることができていたことがわかる。このような成功体験を積み重ねることにより、次の学習にも意欲的に取り組むことができるようになると思われる。

**◇4年生「C児」の場合**

表3-7は、理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」の単元の前に行った、C児のアンケートの結果である。

表3-7 C児の事前アンケートの結果

番号	設問	回答
①	今、学校でしている勉強は、しょう来社会に出たときに役立つと思いますか。	まあそう思う
②	今、あなたが勉強しているのはなぜですか。	「しなくてはいけないこと」だから
③	今、あなたが授業中にがんばりたいことは何ですか。	わからないことを質問すること
④	あなたは、理科の授業が好きですか。	好き
⑤	あなたは、図かんで調べることは好きですか。	まあまあ好き
⑥	あなたは、実験することは好きですか。	好き
⑦	あなたは、観察することは好きですか。	好き
⑧	あなたは、知りたいことを自分一人で調べることは好きですか。	あまり好きではない
⑨	あなたは、グループで話し合っって問題をとくことは好きですか。	あまり好きではない
⑩	あなたは、クラスのみんで話し合うことは好きですか。	まあまあ好き
⑪	あなたは、クラスのみん前の前で自分の考えを発表することは好きですか。	好きではない

設問②、⑧、⑨の回答から、理科に対して前向きな気持ちで取り組めていない、C児の心情がうかがえる。また、設問⑩の回答から、クラスのみん前で発表することに苦手意識をもっていることがわかる。実際のC児の様子を観察していると、学習に向かう姿勢はまじめで、積極性も十分に感じることができた。ただ、周りとの協調し、一つの解決に向かってグループで活動したりする際には、一歩身を引く、話し合いの外側から様子を観察するような態度を取る姿が見られた。指導者としては、C児には、クラスやグループのリーダーとして活躍してほしいという思いがある。今後、C児がどのような目標を立ててこの単元の学習を進めていくのかを見ていくこととした。

C児は、振り返りカードの中で、「次時の目標設定」の枠に次のように記述していた。

**次の時間にがんばりたいこと**

- (2時間目) 次は、ちがう方法で空気を見たい。
- (3時間目) 次は、空気のかでどうして物がとぶのか知りたい。
- (5時間目) 次は、もっとノートをきれいに書く。

これらの目標設定を見ていると、「次はこうしたい。」という自己実現に向けた前向きな願いをもって、学習に臨んでいることがわかる。実際に、授業中のC児の様子を見ていても、発表を活発に行ったり、グループ活動で中心となって話し合いを進めたりと、集団の中で意欲的に活動する姿が見られるようになってきた。

C児は、学習で理解したことを的確に振り返り、知識や技能を習得できていることがわかる。そのことが、理科の学習に対する意欲につながり、C児の積極性を生み出したのではないかと考えられる。

表3-8は、C児の振り返りカードの記述である。

表3-8 C児の、成功体験・改善点の枠に記された1, 3, 4, 5時間目の記述内容（一部抜粋）

時	成功体験の振り返り
①	空気は、何かにとじこめないとかんじよくわからない。
③	ノートをきれいにまとめられた。
④	センとおしぼうをできるだけはなすとよくとんだ。
⑤	水の力と、空気の力とのちがいがわかった。

成功体験の振り返りの記述の中から、C児のコメントを抜粋した。これらから、C児が、自分のできたことや理解したことを的確に振り返っていることがわかる。

C児の学習に向かう積極性を顕著に見ることができた場面として、6, 7時間目の「自由実験」の様子について詳しく述べたい。

はじめ、グループで活動をするとき、グループ活動があまり好きではないからか、少し不安げな表情を見せていた。そこで、この単元の中では、グループで協力することの大切さやすばらしさについて、繰り返し子どもたちに伝えてきていた。そのことがあってからか、活動の内容が示されると、不安な様子は消え、グループの中心となって、話し合いに参加していた。

実験を選択する際に、このグループでは、話し合いを通して、取り組む実験をスムーズに決めることができていた。自分たちで決めた実験ということもあり、活動するのが楽しみで、興奮気味に実験の時間を待つC児の姿が見られた。

このグループが選択した実験は、「ちゅうしゃ器でっぼうの実験」である。注射器型のおもちゃの先に物を詰め、飛ばして距離を測ったり、水を入れて水鉄砲をつくったりする。自分たち

がつくった空気でっぼうと同じ原理であることに気づき、先が小さいことで勢が増すことを、感覚として理解できることが大切である。また、水でっぼうにも発展させることができる魅力的な実験素材でもある。

子どもたちの考えた実験は、空気でっぼうのときと同じように、栓となる物をいろいろと試してみても、一番遠くに飛ぶ栓の材料を調べるというものであった。早速、グループの中で、「だれが何の材料を持ってくるか」ということを分担する話し合いを始めた。グループの中の3人が、栓となる材料（リンゴ、ニンジン、ジャガイモの3種）を一つずつ家から持ってくることに決まった。C児は、ジャガイモを持って来るようになった。

次の日、7時間目の実験が始まると、「外でやってみよう。早く行こう。」と、グループの友だちをうながし、積極的に実験に取り組む姿が見られた。

学習の後半には、その結果を言葉でノートにまとめていた。C児は、「ノートにきれいに字を書く」という目標を以前から立てていたこともあり、グループで話し合ったことを、黙々とていねいな字でノートにまとめていた。全体の交流の場では、グループの代表として、自分たちのしてきた実験とその結果を、堂々と全体の前で発表していた。

以下は、振り返りカードの記述である。

#### わかったこと うまくいったこと

にんじん、りんご、じゃがいも、チョークの中では、チョークが4mくらいとんで、すごかった。ジャガイモは2mくらいとんだ。リンゴとニンジンは同じくらいで1mくらいとんだ。

自分たちの実験で、一つの結果を導き出したことに対して喜びを感じていることが、C児の様子からもうかがうことができた。

単元の前には、苦手意識をもっていた集団での活動に対し、自分のリーダー性や役割を認識することで、積極的に活動することができていた。目標を設定したり、自分の活動を的確に振り返ったりする活動を通して、活動に参加する積極性や意欲を引き出すことができたことと分析する。そのことが、C児自身の自己実現にもつながったと感じる。

#### ◇2年生「D児」の場合

表3-9は、国語科「だいじなところに気をつけて」読もう（『サンゴの海の生きものたち』）の単元の前に行った、D児のアンケートの結果である。

表3-9 D児の事前アンケートの結果

番号	設問	回答
①	今、学校でしているべんきょうは、あなたがおとなになって“はたらく”ときにやくだつと思いませんか。	そう思う
②	今、あなたがべんきょうしているのはなぜですか。	自分がせいちょうしたいから
③	あなたがじゅぎょう中がんばりたいことはなんですか。	クラスみんなの前ではっぴょうすること
④	あなたは、国語科のべんきょうがすきですか。	すき
⑤	あなたは、どくしょするのはすきですか。	すき
⑥	あなたは、文を書くことはすきですか。	まあまあすき
⑦	あなたは、本や図かんを読んで、知りたいことをしらべるのはすきですか。	まあまあすき
⑧	あなたは、インタビューなどで人に聞いて、知りたいことをしらべることはすきですか。	まあまあすき
⑨	あなたは、グループで話し合うことはすきですか。	あまりすきではない
⑩	あなたは、クラスみんなで話し合うことはすきですか。	まあまあすき
⑪	あなたは、クラスみんなの前で、自分の考えをはっぴょうすることはすきですか。	あまりすきではない

設問⑨、⑪の回答から、自分の意見を発表することに苦手意識をもっていることがわかる。そして、設問③の回答から、発表ができるようになることを、一つの自己目標として挙げていることがわかる。実際にD児の様子を観察していると、学習全般において自信がなく、進んで挙手する姿は見られなかった。グループ活動では、自分の意見を主張したり、活動に参加したりすることには、消極的な態度を示していた。学習に向かう姿勢はまじめであるが、集中力が続かずに、やることからなくなり、周りの友だちに「今、何をしたらよいのか」を尋ねながら活動する姿がよく見られた。今後、D児がどのような目標を立てながら、この単元の学習を進めていくのかを見ていくこととした。

D児の授業中の様子を見ていても、挙手をしようとする場面が何度か見られたことから、学習に向かう意欲は感じる事ができた。しかし、指名されても、自分の考えを最後まで話せな

ったり、わかりやすく説明することができなかつたりして、指導者が途中で支援を入れる場面が何度かあった。

D児が、「はっきりしゃべりたい」という自己目標を、3、4、8時間目の自己目標に挙げていることから、みんなの前で話せていないことを、「自己の課題」としてとらえ、それを克服したいと考えていることがわかる。指導者は、D児の願いを受け止め、積極的に指名したり、D児のがんばりを学級で紹介し、良い発言をほめたりするようにした。そうすることで、D児の発表に対する自信が、少しずつ育まれていったようである。4時間目の成功体験の振り返りには、「はっきりしゃべれた。」という感想を記述していた。

単元を通しての感想からは、次のような記述が見られた。

このべんきょうをして、自分がせいちょうできたことはなんですか。

はっぴょうがむずかしかったのに、このべんきょうではっぴょうができるようになった。

更に、D児は、「きれいに字を書く」という目標を、1、9、10、11時間目に立てていることから、「字を美しく書きたい」という願いをもち続けていたことがわかる。

指導者は、授業中、D児の横について声をかけ、ていねいに書いていることをほめたり、支援したりしていた。D児は単元を通しての感想で、以下のように記述していた。

本当に自分がせいちょうしたと思って、本当にこのじゅぎょうをしてうれしかったです。なぜなら、ぼくは、あまりみんなが見たら、ちょっと一年生がわからない字で書いているかもしれないから、せいちょうだと思いました。

この記述から、D児が、「発表すること」と「字をきれいに書くこと」という二つの自己目標に向けて努力し、自分なりの自己実現を果たすことができたことに対して、喜びを感じていることがわかる。

指導者が、事前アンケートや振り返りカードの記述から把握したD児の思いや願いを受け、授業中に積極的なアプローチや支援をしたことが、D児の達成感や成就感につながったと分析する。このような成功体験を積み重ねていく取組は、D児の自己肯定感を高めたり、自信をつけたりする上で、有効であったと考える。

## (2) 振り返りカードの活用の実際

分析をして把握した子どもたちの実態を踏まえて、その分析内容をどのように活用し、子どもたちの学習活動に生かすことができるのかということを、具体的に述べてみたい。

振り返りカードの活用のポイントは二つある。一つめは、相談活動を通して子どもの成長・発達をうながすための資料として活用すること。二つめは、指導者自身の授業改善や指導改善に活用することである。

### ■相談活動の資料として

相談活動（キャリアカウンセリング）は、子どもたちのキャリア発達を支援するために行う大切な活動である。「小学校キャリア教育の手引き」には、小学校でのキャリアカウンセリングについて、「単に不安の解消や問題解決だけではなく、新たな環境や課題に勇気をもって取り組めるよう個別に支援すること」(37)と記されている。

中学校、高等学校でのキャリアカウンセリングという、「進路相談」の意味合いが強いが、小学校段階ではもっと幅広くとらえることができると考えている。それは、課題解決や自己実現に向けて、個別、もしくは複数の子どもたちに対して行う、「言語的なコミュニケーションを手段とした支援」としてとらえることができる。

教科学習における「言語的なコミュニケーションを手段とした支援」は、課題設定・振り返りの場面における指導者の言葉かけや子どもたちのがんばりの紹介、課題解決の場面における机間指導や学習指導、また、授業以外の学習相談など、様々な形での支援が考えられる。

どの場合においても、指導者は、子どもたちのキャリア形成を手助けする支援者であるという意識を忘れてはならない。子どもたちの発達をうながし、子どもたちが行う選択や判断を支援するという立場で、相談活動を行うことが大切である。相談者である子どもたちに的確な支援を行うためには、事前に、学習状況や子どものめざす自己像を把握していることが望ましい。その資料の一つとして、「振り返りカード」は有効であると考えられる。

4年生算数科「はしたの大きさの表し方を考えよう」では、その時間に取り組む課題プリントを子どもたち自らが選択し、苦手を克服するという設定にした。この際に大切なことは、「自分の苦手とする課題は何なのか」ということを的確に把握することである。

学習につまずきのある子どもや苦手意識のある子どもは、何がわかっていないのか、何に困りを感じているのかということ、正確にとらえられていないと予想される。指導者は、振り返りカードから、学習に対して困りを感じている子どもたちを毎時間把握しておき、課題設定の場面で個別の相談活動を行うようにした。図3-23は、振り返りカードを参考にしながら、様々な形で個別の相談活動を行っている様子である。



図3-23 様々な形態で個別の相談活動を行う様子

指導者は、振り返りの場面において、「その日の学習でわからなかったところは、問題番号や問題文を記入しておく、振り返ったときに苦手なところがわかりやすいですよ。」と、声をかけていた。実際の振り返りカードには、次のような記述が見られた。

#### わからなかったこと こまったこと（記述の一部）

- ・3.8は1を3こと0.1を8こ集めた数の問題がむずしかったです。
- ・400mをkmに表すのがちょっとわからなかった。
- ・3.4kgを何kg何gに表すのがむずかしかった。

このように、つまずきの箇所を具体的に記すことにより、指導者が子どもの困りが把握しやすくなり、個に応じた支援を考えることができる。

課題を選択する場面では、相談活動を行った。課題を押しつけるのではなく、「どの課題からしようと思っていますか。」「先生もそのプリントからやってみたらいいと思います。がんばって下さいね。わからなかったら聞きに来て下さい。」と、子どもを支援する声をかけていた。

5年生算数科「ならした大きさ（平均）」では、以下のような子どもたちの困りを把握することができた。

#### わからなかったこと こまったこと（記述の一部）

- ・式のじゅん番がわからなかった。
- ・早すぎてわからなかった。
- ・なぜ一つにまとめてから分けると平均がわかるのか。
- ・「○日では何さつになりますか。」のところで、なんでかけ算をするのか。
- ・ $360 \div 3$ がこ数ってことがわからなかった。

指導者は、共通していると感じられた困りにつ

いては、次時の指導に生かすことにした。また、個別の困りと判断した場合には、授業時間外に相談活動を行ったり、授業中にTTに指導してもらったりした。

振り返りカードを書いてみた感想には、「先生に質問しやすくてよかった。」という記述があった。振り返りカードの記述から子どもたちの学習状況を把握し、相談活動を通して子どもたちを支援することにより、安心して学習に取り組むことができていた。

### ■授業の進め方・指導方法を工夫するための資料として

振り返りカードに目を通して、子どもたちの支援を考える際には、一人のつまずきを、その子どもだけのつまずきとしてとらえるのではなく、クラスの多くの子どもたちの困りとして、とらえることが大切である。そして、その困りを解消するために、授業の進め方や指導方法に工夫を加えることが重要である。

下表3-10は、実践の中で、どのような記述から、どのような授業の進め方・指導方法の工夫を行ったかという改善方法である。実践した教科全てに共通して行っている。

表3-10 振り返りカードを生かした、授業の進め方・指導方法の工夫例

振り返りカードの記述	授業の進め方・指導方法の工夫例
・〇ページの〇番の問題がわからなかった。	次の時間のはじめに、困りの多かった問題を取り上げ、復習の時間を設定する。
・問題の意味がよくわからなかった。	課題把握をしやすいうように、プレゼンテーションソフトを活用した映像や、掲示物、フラッシュカードなどを準備した。
・算数新聞の書き方がわからなかった。 ・まほうじんのやり方がわからなかった。	新しい課題に取り組む際には、もっと具体的でわかりやすい例示や説明を心がける。
・発表がはずかしい。どうしたら自信がもてるのか、教えて下さい。	発表をうながし、励ますような個別対応を心がける。
・メモをとることがあまりできなかった。 ・ビデオにおいてメモすることがむずかしかった。	メモの取り方をもう一度確認する。 話や映像の提示を、子どもたちの実態に合ったスピードにする。
・原こう用紙に書くのがむずかしかった。	原稿用紙の書き方についても一度確認する。

子どもたちの示したつまずきや困りを把握し、自分の授業の進め方や指導方法に、表3-10のような工夫を加えていくことにより、よりよい教科指導が可能になると考える。

また、振り返りカードに記された、ある子どもの成功体験を全体の場で紹介することにより、子どもたちの学習意欲や学習態度をより高めることができるようになる。下表3-11は、指導者がどのような記述をどのようなねらいで全体で紹介したかを示したものである。

表3-11 振り返りカードの記述を全体で紹介する指導者のねらい例

振り返りカードの記述	指導者のねらい例
・スポンジで飛ばすとよく飛んだけど、ねんどやわたはあまり飛ばなくてふしぎだった。	空気はしっかりと閉じ込められていないと、押し返す力が働かないということを全体の場で共通理解するため。
・理由がしっかりと書けるようになった。 ・小数のたし算やひき算の理由がちゃんと書けた。	理由を書くことを推奨し、意識づけたり、意欲を高めたりするため。
・整数と小数の説明がうまくできてよかった。	わかりやすい説明ができていたことを取り上げ、発表する意欲につなげるため。
・〇〇さんがとてもじょうずに音読していた。 ・△△さんの発表がとてもわかりやすかった。	〇〇さんや△△さんの自己肯定感や自尊感情を高めるため。友だちのがんばりに気づくことを奨励するため。
・しせいを正しくできた。 ・発表できた。 ・ノートをきれいにとれた。 ・先生の顔を見て話を聞いた。	授業態度を意識し、意欲を高めるため。
・自分の目標を達成できた。 ・目標に向けてがんばれた。 ・めあてを達成できた。	目標設定の大切さ、振り返りカードの意義について共通理解をうながすため。

成功体験を他者と共有することは、本人の喜びとなり、自己肯定感や自信を高めることにつながる。また、そこで紹介された子どもの姿は、周りの子どもたちのモデルとなり、“めざす姿”となる。

振り返りカードは、子どもたちの考えや思いを知り、それを次の授業に生かして、指導方法の工夫につなげる有効な方法である。

- (33) 京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画（移行措置版）算数』 2010 p.5-算-21
- (34) 京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画 第4学年』 2005.3 p.4-算-26
- (35) 前掲(31) p.4-理-20
- (36) 京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画 第2学年』 2005.3 p.2-国-31
- (37) 前掲(29) p.30

## 第4章 生き方探究教育のこれからの展望

教科学習における生き方探究教育の実践を通して得られた「成果と課題」について述べる。また、個人としての推進の在り方、学校体制としての推進の在り方、指導者としての在り方について、若干の提案を行いたい。

### 第1節 研究の成果と課題

#### (1) 研究の成果 ～学習意欲の内発的動機づけをうながす生き方探究教育～

生き方探究教育を、教科学習の中で実践することにより、子どもたちの学習意欲の内発的な動機づけが可能になると筆者は考えている。

この実践を通して、子どもたちの学習意欲をどれだけ引き出すことができたかということについて報告し、それを研究の成果としたい。

#### ◇社会・生活と学習との関連を意識させる

学習意欲の内発的な動機づけをうながす一つめのポイントとして、**社会・生活と学習とのつながりを意識させる活動**が考えられる。

本研究では、「学んだことが、実際にどのように実社会（実生活）で使えるのか」ということを意識させる場面を採り入れて実践を行った。

第5学年算数科「ならした大きさ（平均）」では、平均の考え方を使って自分の歩幅を算出する体験を通して、学習したことを生活の中で生かす楽しさに気づくことができる、発展的な学習を採り入れた。

第4学年算数科「はしたの大きさの表し方を考えよう（小数）」では、生活に身近な1.50のペットボトルを使った操作活動や、身の回りにある小数調べなどを行った。

同じく、理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」では、閉じ込めた空気の性質が活用されている生活場面について話し合ったり、クラスで共有の体験をもったりする活動を採り入れた。

第2学年国語科「だいじなところに気をつけて読もう『サンゴの海の生きものたち』」では、教材を通して学んだことを、自分の身の回りのことに置き換えて、自分と周りの人との関わり合いについての作文を書くという学習を採り入れた。

以上のような実践を通して、子どもたちは、「勉強は、自分の身近な生活につながっている」という意識をもちながら、学習を進めることができた

と感じる。以下は、ある5年生の子どもが書いた感想である。

この平均の勉強をして、平均でキョリをはかったりするのが楽しかったです。平均の勉強はむずかしいところもあったけど、面白かったです。これから平均の勉強を、くらしに生かせたらいいと思います。

このことから、この子どもがこれからの単元でも「勉強は生活につながっている」という意識をもち、学習に臨む姿が予想される。学習する意義を理解することにより、子どもたちは、自分の学習に目的意識をもって取り組めるようになっていた。そのことが、子どもたちの学習意欲の内発的な動機づけにつながったと感じる。

#### ◇自己決定の場を設ける

学習意欲の内発的動機づけをうながす二つめのポイントとして、**子ども自らが課題を選択し、自己決定する活動**が考えられる。

本研究では、課題を選択・決定する場面を採り入れて実践を行った。

第5学年、第4学年の算数科の実践では、「考えの根拠を言葉や図でわかりやすく記述する」という個別の課題解決の場面を大切にした。解法を自己決定して課題解決に向かうことで、意欲的に学習に取り組むことができていた。

第4学年算数科「はしたの大きさの表し方を考えよう（小数）」では、単元の終わりに、子ども自らが自分の習熟に合わせて課題プリントや課題を選び、習熟を図るという時間を設定した。同じく、理科「とじこめた空気や水」では、実験内容や実験方法を子どもが選択し、主体的に取り組む時間を設定した。どちらも、子どもが自ら選択して課題を決定したことにより、より意欲的に学習に取り組むことができていた。

第2学年国語科「だいじなところに気をつけて読もう」では、これから読み進める教材文の「読みのめあて」を自ら決定したり、海の生き物図鑑に載せる生き物を、根拠をもって決定したりする活動を採り入れた。自分たちで課題を設定し、協力して課題解決に向かうという授業の流れが、子どもたちの主体的な学習につながったと考える。

子どもたちは、自らの課題や実験内容、実験方法、学習内容などを、選択・判断・決定することにより、学習意欲を高め、主体的に学習に取り組むことができていた。

## ◇自己目標を設定する

学習意欲の内発的動機づけをうながす三つめのポイントとして、自己目標を立てたり、自分の取組を振り返ったりする活動が考えられる。

本研究では、「振り返りカード」を用いて、自己理解・将来設計能力の育成を図るとともに、自己実現をめざして主体的に活動する、学習態度の向上をめざした実践を行った。

実践したクラスの子どもたちに、「振り返りカードに記録を残しながら学習に取り組んでみた感想」を求めた。その記述内容から、子どもたちは、「振り返りカードを活用することが、教科目標を達成する上でも有効であった」と判断していることがうかがえた。以下は、「振り返りカードを書いてみてどうでしたか。」という質問について書かれた感想の一部である。

- ・がんばりカードにこの時間がんばりたいことがあったから、目ひょうをもって楽しくできた。とくに字をきれいに書けるようになった。（2年生児童）
- ・前はぜんぜんはっぴょうできなかったけど、できるようになった。（2年生児童）
- ・自分がわかっていることやがんばりたいことが、ひとめでわかるのでいいなと思いました。（4年生児童）
- ・このカードを書いて、自分が「この時間は、こういうことをがんばろう」ということがもてとてもよかったです。ほかの教科でも、これがあると今までよりも目ひょうがもて、しっかり勉強にしょう中できるようになると思います。（4年生児童）
- ・このカードを書くことで、自分のめあて（目標）がわかり、とてもがんばれた。それに、はんせい点もわかって、次の時間の目標を決めるのはとても楽しかった。これからも続けていきたい。（5年生児童）
- ・カードを書いて、毎回、目標を決めたから、その目標を達成したときの達成感が得られて、とても楽しかったです。めあてをもって取り組むことの重要性がわかってよかったですと思いました。（5年生児童）

「授業がわかりやすくなった」という感想のほかに、自己実現や自己理解についても役立つとうかがえる記述が多く見られる。「自己目標」に、自分の成長や困りをカードに記入することで、多くの子どもたちが自己実現を果たすことができていた。また、満足感や達成感、成就感を感じることもできていたと考える。

以上のことから、生き方探究教育の視点を踏まえた教科学習は、子どもたちの学習意欲の内発的な動機づけをうながすことに有効であったといえる。

## （2）研究の課題 ～「実践」から「継続」へ～

本研究の実践授業を振り返った際、課題として考えられることを以下に述べる。課題は大きく二つあると考える。

### ◆振り返りカードの活用に関する課題

成果に挙げていたように、振り返りカードの子どもたちの受け止めは大変前向きで、成果があったととらえている。また、各指導者からも、学習意欲を高めることに効果的であり、学習支援の資料として大いに役立ったという感想を得ている。しかし、このカードを、全教科、全単元で行うことは、時間的な負担や作業の煩雑さから、本来のカードの良さを損なうおそれがあると考えられる。そこで、筆者が考える振り返りカードの適度な活用頻度について示してみたい。

まず、短い単元で活用し、子どもたちにカードの活用の目的や意義や良さ、使い方や見方などを、十分に理解させることが大切であると考ええる。

更に、子どもたちがカードに親しんできたところで、少し長い単元で活用したり、同時に二つの教科で採り入れてみたりと、徐々に活用回数を増やし、習慣化していくことが望ましいと考える。また、年間に、同じ教科で2単元以上実施することができれば、子どもたちの成長を長期間に渡り見取ることができるようになる。

このような観点から、長期の活用計画を立てることが求められる。多くの教科・単元で活用されることを通して改良が加えられることにより、活用の場を更に広げていくことが大切であると考ええる。

### ◆評価についての課題

二つめの課題は、生き方探究教育の評価についてである。

「教科の目標が達成できたか」「5領域17の力を育むことができていたか」ということを、45分で見取り、更に、振り返りカードに目を通すことを日常的に行うためには、その意義と効果を十分に理解しているだけではなく、粘り強い実行力と継続力が必要になる。

生き方探究教育で育てたい力は、これから先の

生涯を通して、徐々に身につけていく力である。子どもたちの成長を長い期間で見取っていくためには、日々の取組を継続し、不断の評価活動を行うことが必要である。

継続的な取組による成果を得るために、指導者は、自己評価の習慣化、取組の日常化を求め続け、時間軸の中で、子どもたちの成長を見取る仕組みを整えることが大切であると考えます。

## 第2節 さらに充実を求めて

### ○ 生き方探究教育の推進の在り方

本研究で具体的に述べてきたモデル例は、それぞれの指導者が、すぐにでも実践に移すことのできるような内容であると考えている。しかし、これらの取組が学校体制の中で組織化され、地域や社会を巻き込んだ教育活動として位置づけられることにより、生き方探究教育の更なる推進を図ることが可能になると考える。また、学校体制の中核にこの教育が位置づけられることによって、学校と、異校種、地域、職場などとのつながりが深まり、より系統だった子どもたちのキャリア発達の道筋が描けるようになると考えている。

〈概要編〉やブックレット（「未来の樹を育てる生き方探究教育（キャリア教育）」）には、学校体制としてこの教育を推進し、地域や家庭、各校種が連携して組織的な取組をしていくことが、この教育の充実につながることを示されている。

ブックレットの中で、河野は、「全ての教職員が、生き方探究教育のねらいを十分理解し、組織的・機能的に推進していくことが大切です」（38）と述べ、学校体制としての推進の在り方を、手順を示しながら具体的に説明している。

このように、組織が連携し、一体となって生き方探究教育を推進していく在り方を、ここでは、「組織としての推進」とする。

また、学校組織の構成員である指導者一人一人が、この教育の意義や目的を十分に理解し、身近な教育活動から実践を進めていこうとする推進の在り方を、「個としての推進」にすることとする。

筆者は、これらの二つの在り方（「組織としての推進」と「個としての推進」）が、バランス良く採り入れられ、推進が図られることによって、この教育が更に充実していくと考えている。

二つの推進の在り方を示す構造図として、図4-1のような図を考えた。

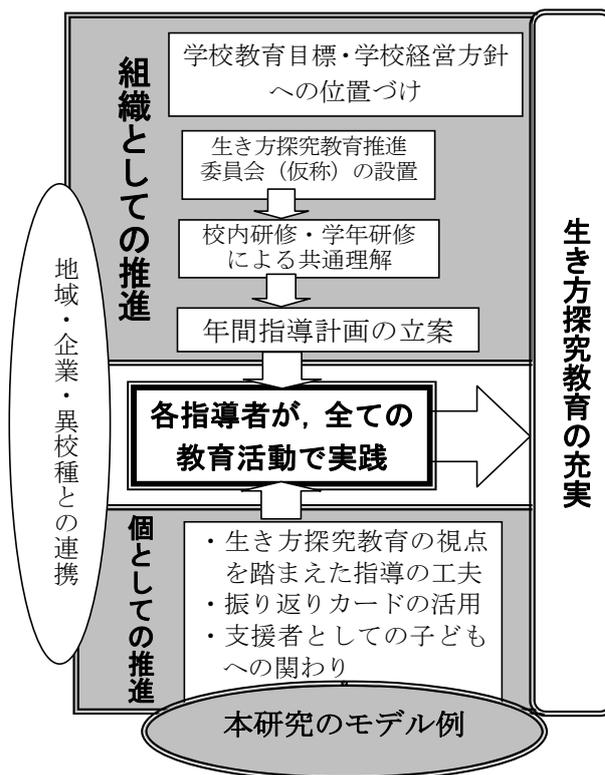


図4-1 生き方探究教育の推進の構造図

「組織としての推進」では、学校運営の中核として、生き方探究教育を位置づけていくことが望ましい。その上で、推進委員会などを設置し、校内研修などを通して、指導者の共通理解を図ることが求められる。

「個としての推進」では、各指導者が、他校での取組や、本研究で紹介しているようなモデル例を参考にしながら、積極的にこの教育を実践していくことで推進が図られると考える。

### ○ キャリア発達をうながす支援の在り方

この教育を推進していくとき、指導者は、子どもたちの自己実現をめざした道筋を、ともに歩む「伴走者」であるという立場で、日々の教育活動に取り組んでいくことが大切である。

子どものキャリア形成は、様々な体験によって促進される。体験の中で、選択・決定を行ったり、多くの人と関わったり、自分の役割を認識したりする経験を積むことが大切である。そして、体験したことを振り返り、自分の成長を確認することで、自己理解能力を育み、自己肯定感や自尊感情を高めることができるようになる。と考える。

子どもたちには、様々な体験の場を提供したり、自己を振り返るきっかけを与えたり、目標設定をうながしたりする指導者の存在が必要である。キ

キャリア発達の支援者として、子どもたちの成長に寄り添い、励ましながら、ともに道を歩むことの重要性を、実践を通して実感することができた。

子どもたちが、様々な体験を通して、自分たちの“キャリア”を形成していく道筋を、図4-2に表した。

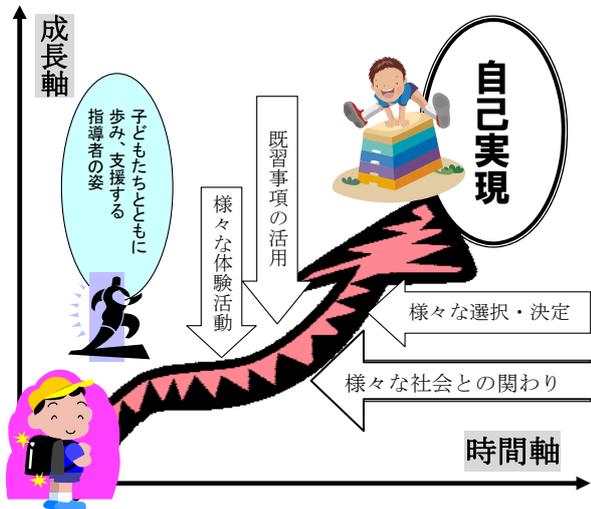


図4-2 自己実現をめざす子どもが歩む、キャリア発達の道筋

この図に示すように、子どもたちの歩むキャリア発達の道筋は、時間軸と成長軸の中で、自己実現に向けて歩いていく過程であるといえる。目の前の子どもが成長の過程の途中にいることを、指導者は、心に留めておく必要がある。子どもたちが、これから遂げていくキャリア発達の過程を見据え、先の教育活動に、生き方探究教育の視点を踏まえた支援を採り入れていくことが大切であると感じる。

渡辺は、「キャリアという言葉に含まれる共通の要素の一つ」として、「時間的な流れ」を挙げている。「キャリア」という言葉の意味について、渡辺は次のように述べている。

キャリアは、「過去・現在・未来という時間の流れの中で、個人の行為や出来事、現象を捉える」という意味を含む言葉であるということです。(39)

指導者は、子どもたちの今できないことや、欠点ばかりに目を向けるのではなく、成長を信じ、自己実現を遂げた姿をともにめざしながら、前向きな支援を継続していくことが大切であると考えます。

子どもたちが、キャリア発達の道筋を自ら歩み出せるように、主体的な学びをうながしていくことが大切である。

デール・カーネギーは、その著書『人を動かす』の中で次のように述べている。

人を動かす秘訣は、まちがいでなく、一つしかないのである。すなわち、みずからが動きたくなる気持ちを起こさせること、これが秘訣だ。重ねていうが、これ以外に秘訣はない。(40)

叱責を加えたり、賞罰を与えたりする外発的な動機づけによって子どもたちのやる気を引き出しても、意欲の継続性は得にくいと考える。子どもたちが自己目標を設定し、学習する意義を実感することで、「みずからが動きたくなる気持ちを起こさせること」が大切であると考えます。

子どもたちが、自己選択を重ね、社会や生活と学んでいることとのつながりを感じることができるよう学習活動を工夫することが、自己実現に向けて、主体的に学習に取り組む子どもの育成につながると考える。

(38) 前傾(28) pp. 6~11

(39) 渡辺三枝子『キャリア教育—自立していく子どもたち』2008.3 東京書籍 pp. 25~26

(40) デール・カーネギー『人を動かす』2004.3 創元社 p. 33

## おわりに

本研究では、「明日からでも実践できる生き方探究教育」をめざして、教科学習における実践の在り方を模索し、生き方探究教育の視点を踏まえた授業づくりに取り組んだ。

この教育の魅力に多くの指導者が賛同し、身近な教育活動でこの教育を推進していくことが、生き方探究教育の普及につながると考える。今後、本研究を基にした実践が、多くの学校、学級で進められ、それを多くの指導者が共有することにより、この教育がこれから更に充実していくことを願っている。

最後に、本研究の主旨を十分にご理解いただき、実践授業にご協力いただいた、京都市立竹田小学校及び京都市立桃山東小学校の研究協力員、教職員の皆様に、心から感謝の意を表したい。協力員の方々には、実践授業を通して、様々な示唆やアドバイスをいただいた。更に、時間割や指導に関する特別なご配慮など、紙面では十分に示すことができなかったご協力があったことを、ここに記したい。また、2校の子どもたちは、実践授業の中で生き生きとした笑顔や、課題解決に向かう真摯な眼差しを見せてくれた。子どもたちが、これからも様々なことに主体的に取り組み、自己実現に向けて成長を重ねてくれることを願っている。

【付表】 生き方探究教育の視点を踏まえた学習活動における子どもの姿（例）

・・・表内に示したような「子どもの姿」をめざして、学習活動を設定し、指導を工夫したり、支援したりする。

生き方探究教育で育てたい5領域17の力		各学習場面における、めざす「子どもの姿」			
		課題設定の場面	課題解決の場面（個別）	課題解決の場面（ペア・グループ・クラス）	振り返りの場面
自立	(1) 人と共生する力 (人間関係形成能力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あこがれている人や周りにいる身近な人、または仕事をしている人とのつながりを感じながら、意欲的に学習に取り組んでいる。</li> <li>・グループで協力しながら、学習を進めている。</li> <li>・仕事をしている人の思いや仕事の内容に関心をもっている。</li> <li>・世界の国々や人々の暮らしに、興味をもっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人とのつながりを感じながら、学習に向かっている。</li> <li>・積極的に人と関わりながら課題解決に向かっている。</li> <li>・友だちの考えを聞いたり作品を見たりすることを通して、友だちの工夫やがんばりに気づいている。</li> <li>・ゲストティーチャーやクラス以外の人も積極的に関わり、話を聞いたり質問したりしながら課題解決に向かっている。</li> <li>・ペアやグループで協力しながら、調べ学習をしたり、作品をつくり上げたりする活動に進んで参加している。</li> <li>・インタビューを通して、情報を集めたり考えを深めたりしている。</li> <li>・相手意識をもちながら、学習を進めている。</li> <li>・世界の国々や人々について、進んで調べている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手意識をもって話している。</li> <li>・聞き手を意識しながら、発表を工夫している。</li> <li>・話し合い活動をする際、話し方、聞き方に気をつけている。</li> <li>・相手の意見と自分の意見とを比べながら話し合っている。</li> <li>・話し合いにより、考え方を広げたり、改めたり、深めたりしている。</li> <li>・協力することの大切さや楽しさを理解している。</li> <li>・友だちからの助言を採り入れながら、課題解決に向かっている。</li> <li>・世界の国々や人々に関心をもち、話し合ったり、わかったことをまとめたりしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この時間における、友だちや自分の良さががんばりに気づいている。</li> <li>・人との関わり合いによって、考え方が変わったたり、自分が成長できたりしたこと気づいている。</li> <li>・相談活動を通して、自己の取組を振り返ったり、次時の目標を考えたりしている。</li> <li>・世界の国々の言葉や文化に興味をもち、今後の生活に生かそうとしている。</li> </ul>
	(2) 社会で共に生きる力 (社会参画能力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の産業などに興味を示している。</li> <li>・社会やグループの中での自分の役割や責任について考えている。</li> <li>・家庭生活の中で体験したことを想起し、課題設定に生かしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集団に所属している自分を意識しながら行動している。</li> <li>・地域に出て、調べたりインタビューをしたりしている。</li> <li>・地域のことに興味をもち、意欲的に調べている。</li> <li>・ゲストティーチャーやクラス以外の人も積極的に関わり、話を聞いたり質問したりしながら課題解決に取り組んでいる。</li> <li>・グループの中で、自分でできることや自分の役割を考え、責任感をもって活動している。</li> <li>・マナーを守って行動している。</li> <li>・家族にインタビューしたり質問したりしている。</li> <li>・家族の協力を得ながら調べ学習に取り組んだり、学習計画を立てたりしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いの中では、様々な意見や間違った意見が出ることがあるということを理解している。</li> <li>・クラス以外の人に情報を発信したり、クラス以外の人からその内容について評価を受けたりしている。</li> <li>・話し合いのルールを守っている。</li> <li>・集団での規律やままとまりを意識しながら行動している。</li> <li>・家族の考えや思いを、大切にしている。</li> <li>・相手意識をもって発表している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の役割に責任をもって行動できていたかを振り返っている。</li> <li>・グループでの役割やままとまりを意識して行動できていたかを振り返っている。</li> <li>・学習したことを家庭で役立てようとしている。</li> <li>・学習したことを家族に伝えようとしている。</li> </ul>
	(3) よりよく判断する力 (意思決定能力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・根拠をもつことの大切さを理解している。</li> <li>・自分なりの根拠をもって、解決方法や実験方法を選択し、課題を設定している。</li> <li>・自ら課題を選択したり、設定したりしている。</li> <li>・本時の課題を知り、解決に至るまでの見通しを立てている。</li> <li>・よりよい自己実現をめざして、本時の自己目標を決めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物事を決めるときに、根拠を明らかにしながら選択している。</li> <li>・文章や伝えたい内容を吟味し、推敲している。</li> <li>・考えの道筋を明らかにするために、間違えた内容や前の自分の意見も記録に残している。</li> <li>・記録（メモ）する内容を的確に判断している。</li> <li>・調べたりインタビューしたりする内容を選択・判断している。</li> <li>・自分の判断が正しかったどうかを検証している。</li> <li>・場に応じた行動や言葉遣いをしている。</li> <li>・自分の考えを、言葉や図を使ってノートに記述している。</li> <li>・自分が考えたことや予想したことを検証するために、試行錯誤しながら解決に向かっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合うことで、物事を決定している。</li> <li>・自分の考えの根拠を発表している。</li> <li>・友だちの意見と自分の考えを比較しながら聞いている。</li> <li>・発表する内容を取捨選択している。</li> <li>・発表方法を、目的や相手に応じて選択している。</li> <li>・テーマに沿って話し合い、課題解決に向かっている。</li> <li>・自分の考えを相手に伝える方法を選択している。</li> <li>・場に応じた行動や言葉遣いをしている。</li> <li>・目的に応じた話し合いをしたり、話し合ったことを基に課題を解決したりしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師や友だちと相談しながら、自分の活動を振り返っている。</li> <li>・場に応じた行動や言葉遣いを選択できていたかを振り返っている。</li> <li>・困りに対して、どのような解決策があるかを考えている。</li> <li>・困りに対して、自分で解決するのか、周りに相談するのかを判断している。</li> </ul>
	(4) 情報を集め活用する力 (情報活用能力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時で学習することと、身近な生活事象や職業などを、結びつけて考えている。</li> <li>・課題を把握し、自分がどのような情報を収集する必要があるか考えている。</li> <li>・既習事項を活用して課題解決に向かおうとしている。</li> <li>・職業に興味をもち、働いている人の思いや仕事の内容を知ろうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートや付箋紙、表、図、ICT機器などで情報を整理している。</li> <li>・目的に応じて、情報を収集している。</li> <li>・既習事項や生活の中で体験したことを一つの情報として活用し、課題解決に向かっている。</li> <li>・情報源をはっきりさせることの大切さや、その情報の正当性を検証することなど、情報の扱い方を理解している。</li> <li>・映像や画像などの視覚教材から、様々な情報を収集している。</li> <li>・職業について具体的に調べたり質問したりしている。</li> <li>・体験したことと学習とを結びつけて考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合い活動を通して、生活体験や過去の経験を交流し、共有している。</li> <li>・調べたことを発表する際、視覚的にわかりやすい工夫をしている。</li> <li>・様々な伝達方法を理解している。</li> <li>・友だちの発表を聞いて、その情報をまとめたり、よりよくなるように評価やアドバイスを加えたりしている。</li> <li>・発表方法を、目的や相手に応じて選択している。</li> <li>・職業についての情報を共有している。</li> <li>・発表するときに、適切なICT機器を活用している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習したことを、今後の生活に生かそうとしている。</li> <li>・学習したことを自分なりの方法でまとめ、次時に生かそうとしている。</li> <li>・学んだ伝達方法を、次の学習や他の場面で活用している。</li> <li>・自分たちの学習している内容が、生活や社会とどのようにつながっているのかを考えたり、意識したりしている。</li> </ul>
	(5) 自己の夢をつくり上げる力 (自己理解・将来設計能力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の社会的役割を理解している。</li> <li>・単元や本時の教科目標を理解している。</li> <li>・学習の流れを理解し、学習の見通しをもっている。</li> <li>・課題解決に向けて進んで学習計画を立てている。</li> <li>・よりよい自己実現をめざして、本時の自己目標を決めている。</li> <li>・何事にも積極的に関わろうとしたり、知ろうとしたりしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決に向けて、最後まで粘り強く取り組んでいる。</li> <li>・立案した学習計画を基に実行している。</li> <li>・自己目標に向けて、意欲的に学習に取り組んでいる。</li> <li>・課題解決に至るまでの道筋を、記録として残している。</li> <li>・自分の考えの道筋が見えるようなノートづくりを心がけている。</li> <li>・課題解決に向けて、意欲的に学習に向かっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の役割や目標を意識して課題解決に向かっている。</li> <li>・友だちの考えや、自分の考えの変容、新たな気づきなどを記録している。</li> <li>・課題解決に向けて、意欲的にグループ活動や話し合い活動に参加している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的な役割やマナーを意識して行動できていたかを振り返っている。</li> <li>・自分の困りを課題としてとらえ、解決策を考えている。</li> <li>・本時の教科の目標や個人目標に対する振り返りをする中で、自分の困りや成長をとらえている。</li> <li>・自分の成長を知るので、喜びや成就感を感じている。</li> <li>・次時の目標を積極的に立てている。</li> <li>・相談活動などを通して、自己を的確に認識している。</li> </ul>